【習作】禁刃のラジオ　～大戦の舞台裏～

アヴェンジャー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
【習作】禁刃のラジオ　～大戦の舞台裏～

【Ｎコード】
Ｎ３０４６Ｑ

【作者名】
アヴェンジャー

【あらすじ】
常にシリアスな状況となっている拙作『禁断の刃』。しかしその舞台裏では……

これは作者が息抜きで執筆しています。軽い気持ちで読んで頂く事をオススメします。

第0回「Why did you start this!?」（前書き）

色々な方に触発されてやってしまいました……

ドン亀更新になる事必至ですが、宜しければ読んで下さい！

第0回「Ｗｈｙ　ｄｉｄ　ｙｏｕ　ｓｔａｒｔ　ｔｈｉｓ！？」

とある世界の一室、そこに４人の男女が集まっていた。

エルデ「おい、何故私達が呼ばれているんだ。今日はドラマの収録は休みだろー」

バウム「いや、今日『も』でしょう。馬鹿な駄作製造機は最近脚本の更新速度が落ちていますからね」

フラメ「まあ元々、あの駄作製造機はその場の思いつきだけで本編の展開考えてココまで来たしね。Ｎｏ　ｐｌａｎココに極まれりって状態であそこまで続けられたって事が驚嘆に値するよ」

バウム「それ、物凄く他の作者の皆さんに失礼ですよね。と言うかプロットも無しに書き始めたんでしたっけ？」

エルデ「あー、そーだ。それで話が膨らみに膨らんで……まるで駄目な脚本家と駄目な監督を足した様なヤツだなー」

シュヴァルツ「待てお前ら。暴露や馬鹿をこき下ろすのは他所でやれ。それで結局、アイツが俺達をココに呼んだ理由は何なんだ」

（シュヴァルツにだけ見える様に１枚のカンペが出される）

シュヴァルツ「……馬鹿かアイツは。いや、馬鹿だな。もうアイツは馬鹿と言う名で十分だ」

エルデ「おい、どーしたシュヴァルツ？一体何が書いてあったんだ」

シュヴァルツ「……このブースに呼ばれた時点で薄々感付いてはいたが、あの馬鹿……他の作者方の様にラジオ的番組をやろうと思ったらしい……」

バウム「駄作製造機……正気ですか！？」

フラメ「Ｉ　ｆｅｅｌ　ｓｏ　ｂａｄ……こう言うのはもっと人気のある作品でやる企画だろ？ゲストを呼ばないと話自体が書けない

って言うＳｔｙｌｅなんだから」
シュヴァルツ「全くだ……こんなドの付く駄作に……。まあ良い、取り敢えずコーナーを紹介せねばな……」
バウム「えーと、コーナーは……
『質問！禁断の刃！』
我々『王佐の刃』が総出演しているドラマ『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～禁断の刃～』についての質問コーナーですね。勿論個人的な質問も受け付けています。
『解体！ゲストはこんな人！』
このラジオに参加して下さるゲストの方への質問コーナーです。
『告白！私の実体験！』
リスナーの皆さんが最近感じた事を発表して、それについて司会進行とゲストの皆さんで話すコーナーです。基本的な常識に沿っていれば、どんな内容でも構いません。
……え？これだけ、ですか？」
エルデ「どーやらそーらしいな……。あの馬鹿、募集するとか言っているがコーナー１つロクに考えられないのか……」
フラメ「ならやるなって言いたいね。と言うか視聴者の皆さんにＣｏｒｎｅｒの募集するＲａｄｉｏなんて聞いた事が無いよ」
シュヴァルツ「まあやる気だけはある様だがな……ドコまで続くか見るとするか……」

エルデ「まー2、3回が関の山だろーな……。おっと、もー時間か。なら今日はココまでだ」
フラメ「次回も楽しみにしていてよ」

禁刃のラジオ　～大戦の舞台裏～の募集要項

ゲスト出演条件

1．最低１０話以上進んでいる作品で、作品での立ち位置が明確なキャラ。

2．リリカルなのはの二次創作（但し、作者が知っていれば他作品でも可能です）。

3．最低2ヶ月以内に更新している作品。

4．上記の条件を満たした上で、メッセージで出して欲しいキャラクターについて送って下さい！

お便りコーナー

1．送るのはメッセージ、若しくは感想でお願いします。

2．住所（勿論架空の物でお願いします）・ペンネーム・送るコーナーのタイトルとその内容を書いてムーギネーターのメッセージボックスへ。

3．荒らしや中傷など、非常識な物以外なら下記のコーナーのお題とは関係の無い普通のお便りでも受け付けます。

コーナーのタイトル

『質問！禁断の刃！』

本編『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～禁断の刃～』についての質問コーナーです。本編の内容や登場キャラクターへの質問について司会進行が答えます。

『解体！ゲストはこんな人！』

このラジオに参加して下さるゲストの方への質問コーナーです。

『告白！私の実体験！』

リスナーの皆さんが最近感じた事を発表して、それについて司会進行とゲストの皆さんで話すコーナーです。

この他に、コーナーについても募集しています！どしどし御応募下さい！

第１回「１歩も退けない限界Ｂａｔｔｌｅ」（前書き）

遅くなって済みません！

残念クオリティですが、生温かい目で見てやって下さい！

第1回「1歩も退けない限界Ｂａｔｔｌｅ」

モント「……」

ヴァッサー「なあモント、アンタさっきから黙ってるけど一体どうしたのさ？もしかしてあの馬鹿駄作製造機の引退の予定とか今日のゲストの事で悩んでんの？」

リヒト「確かにスタジオ入りの時からおかしいかも。またあのゲストの人と凄い喧嘩でもしたの？」

モント「ああスイマセン、そうじゃねえんです。ちょっと自分のテーマソングについて考えてましてね」

ヴァッサー「は？テーマソング？」

モント「ええ。こないだウチの駄作製造機と話してたんですけど、その話題になった時にあの馬鹿何て言ったと思います？」

リヒト「う～ん……。ちょっと分からないかも」

モント「あの馬鹿、『そう言えばお前って一応王子で側近3人いるよね。だったらさ、『〇物くん』で良くね？』とかぬかしやがったんですよ」

ヴァッサー「ひ、酷いねそれは……」

リヒト「ちょっと同情するかも……」

モント「まあ即勇者王の拳の先端に括り付けてゾ〇ダー目掛けて発射してやりましたけどね。今頃取り込まれてる最中なんじゃねえですか？」

ヴァッサー「おお、グロイグロイ（笑）ま、アイツなら光になっても１０分で再生するし大丈夫じゃないの」

リヒト「２人共さり気無く凄い話をしてるかも……そ、それより早く始めるんだよ！」

禁刃のラジオ　～大戦の舞台裏～　第１回「１歩も退けない限界Ｂａｔｔｌｅ」

モント「どうもこんにちは。今回の司会はこの僕、最近ミッドケーブルＴＶで放送中のドラマ『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～禁断の刃～』で国を攻め立てられてる『大斧のモント』と」

ヴァッサー「継ぎ接ぎのサイボーグ状態でついこの間復活した『海月のヴァッサー』」

リヒト「そして、最近また出番が無い『魔本のリヒト』だよ」

モント「しかしまさか前回あんなに反響があるとは思いませんでしたよ。てっきり『とっととこの世界から失せろバカ』って苦情が駄作製造機に殺到するかと思ったのに」

ヴァッサー「普通ならお礼位は言うのがスジだろうけど、今回ばっかりは流石にねえ……。何しろあの馬鹿、勝手も分からないのにやってる訳だし」

リヒト「それはこれからの行動で挽回すれば良いかも。それよりそろそろ今日のゲストを呼ぶんだよ。（カンペを読みながら）……今日のゲストはこの2人！夜天の主にゾッコン！彼女の為なら喩え火の中水の中草の中、いやいや次元や時をも越える！天下無敵の『はやコン同盟』の『キング・オブ・ハヤコン』こと、『東条咲夜』と！」

ヴァッサー「（カンペを読みながら）何やかんやでそんな主を放っとけない！目下の悩みはそんな良妻賢母な自分の扱い！超絶可憐なユニゾンデバイスの『レフィリア』！」

咲夜「おいちょっと待てそこの暴食修道女モドキ。そこはかとなくイタイ感じの紹介すんな！なあレフィ……」

レフィリア「（スタッフとハイタッチしつつ）イエーイ！流石は超一流のスタッフ！お主達とは良い酒が飲ぶふぇっ！？（咲夜のパンチで壁に減り込む）」

咲夜「何をしてんだお前らはアアアアッ！！！！！と言うかレフィリア、あの大金はこの為か！？この為に使ったのか！？」

（『スタッフ一同で美味しく頂きました』と書かれたカンペが出される）

咲夜「ドコのカネゴンだお前らは！公然と汚い裏事情を暴露してんじゃねえ！」

ヴァッサー「まあまあ落ち着きなって。取り敢えず水でも飲みなよ」

咲夜「あ、どうも」

ヴァッサー「そう言えば私は違うけどさ、２人は咲夜とは付き合いがあるんだよね？」

リヒト「うん、コラボでお世話になったんだよ！」

モント「僕は全部で2回……いや、未公開のを含めたら3回ですね。父上とコイツの御父上が親友なんでそれなりに付き合いはあんですよ」

咲夜「ゲストを指で差すなよチビ。何時も会う度に思うけど容姿と言い礼儀のなってねえ所と言い、テメェはホントに親父さんに似てねえな。やっぱり橋の下で拾われたんじゃねえか？」

モント「その台詞……そっくりそのままバットで打ち返してやりますよ」

咲夜「それを更にバットで打ち返してやるよ」

モント「それを更にバットで……」

ヴァッサー「もう良い、しつこい（鋼鉄製ハリセン）」

モント&咲夜「ぐはっ！？」

リヒト「うわ……凄い綺麗な音が……（汗）お互い大変だね」

レフィリア「うむ、これさえ無ければ2人共良いコンビなのだがな……」

モント（頭に×字の絆創膏）「いてて……こうなりゃ決着はこの収録が終わった後着けましょう。逃げんじゃねえですよ」

咲夜（頭に×字の絆創膏）「それはこっちの台詞だっつーの！今度こそ決着を着けてやる！」

リヒト「確かに……と言うか鋼鉄のハリセンで殴られたのにアレで済むって……」

～質問！禁断の刃！～

リヒト「このコーナーは、『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～禁断の刃～』についての質問コーナーだよ。ドラマの内容とか、登場する人達への質問について私達司会進行が答えるんだよ」

モント「さて、今日最初のお便りは某魔法学院の床下にお住まいのＲＮ：自称仙人（笑）さんからですね……。どれどれ……

『ドラマでめっさ大金をつぎ込んだ兵器が次々と破壊されてしまったゼレナ・ヒューイットさんですが、彼女は昔からあんな感じなんですか？
というか歴代最高の無駄遣げふんげふん！消費額は大体どれくらいなんでしょうか？
おや？こんな時間に誰か尋ねて来たようｄ（以下ハガキが血で濡れていて読めない』

……ドコのモグラですかっつうツッコミ以前に、お便り送ったの一体誰なんですかコレ（汗）」

レフィリア「送り主の状況と言い質問の内容と言い、凄まじく気に

なるな……」

ヴァッサー「まあ送り主の安否は後で確認するとして、まず質問に答えねぇとなぁ……スタッフ」

（携帯電話が運び込まれる）

ヴァッサー「えーと……真っ暗ヤミヤミ、と……」

レフィリア「それは恐らく闇金の電話番号だ！本当に取り返しがつかなくなるぞ！」

リヒト「多分それゼレナが愛用してた金融会社の電話番号かも。最近摘発されたって聞いたけど」

咲夜「何してんだあの人は！と言うか家族や部下は途中で止めろよ！」

モント「咲夜……ちったあ冷静に考えて下さい。『あの』ヒューイット家にそんな常識的な行動取れる人間がいると思いますか？」

咲夜「うん、いないな」

レフィリア「即答！？一体どんな家族だと言うのだその『ヒューイット家』と言うのは！」

咲夜「レフィ、世の中には知らない方が良い事があるんだ。今聞いた事は全部記憶の廃品回収業者に出して来い」

レフィリア「無茶を言うな主！こんな情報聞かされてスルー出来「

忘れたらケーキを1ホール奢ってやる」良し分かった忘れよう」

リヒト「レフィリア、ちょっと意地汚過ぎるかも……」

モント「店のコックをノックアウトする程食って出禁喰らったアンタにそんな事が言えんですか、リヒトさん……」

ヴァッサー「ああゼレナ？ちょっと聞きたい事があんだけどさぁ……うん、ああ……そうなんだ。あ、ありがとう助かったよ（電話を切る）」

モント「ヴァッサーさん、ゼレナさんは何つってました？」

ヴァッサー「まず最初の質問だけど、答えはＹＥＳだとさ。アイツは今２４才なんだけど、大体９才位の頃に最初の散ざ……メカを完成させたらしいよ。因みにその時に作ったのは等身大のカレーカラーのザ〇だって」

咲夜「何作ってんだよ……ってか今散財って言い掛けてましたけど、具体的にどの位使ったんです？」

ヴァッサー「車が買えるレベル」

レフィリア「使い過ぎであろう！それだけあれば何個プリンが買えると思っておるのだ！」

モント「その発想もどうかっつう話ですけど……じゃあ今までで１番使い込んだのはどの位なんですか？」

ヴァッサー「国４つぶっ潰す額、ついでにそれで造ったのはドラマ

に出した戦艦『アカツキ』なんだとさ」

レフィリア「う～ん……（気絶）」

咲夜「レフィ！？おいしっかりしろ！」

モント「今更ですけど頭おかしいんですかあの人は……。話題を変えましょう、コレ以上この話を穿り返すと僕達まで卒倒しちまいそうですし」

ヴァッサー「…………だね。って訳で自称仙人（笑）さんの質問の答えだけど、

『ゼレナは昔（９才の頃）から今と同じ』

『無駄遣いの最高額は国４つを潰す程』

だそうだよ。じゃあＣＭを挟んで次のコーナーに行くか」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～～～～

スバル「うーん……」

はやて「どうしたんやスバル～そんなチャーハンに旗が立ってなかった時みたいな顔をして～」

スバル「おー聞いて下さいよ八神部隊長～。最近新しい魔法を覚えようとしたんですけど、これが中々覚えられなくて～」

はやて「あ～それあるな～。でもそんなスバルに朗報や！」

スバル「ワァァオ！何ですかこの立派な魔導書は！」

はやて「今日紹介するんはこちらの『夜天の書』！凄いよコレは……どんな魔法も１発習得！これさえあれば明日から君もエースや！」

スバル「でもコレ見た感じページ数がかなりありますし、お高いんじゃないですか？私の月給じゃちょっと……」

はやて「ノンノン。そんな声にお答えして！今回は通常１００万の所を！」

スバル「所を！？」

はやて「出血大サービス価格！何と特別価格の１万で販売や！」

スバル「おおう！」

はやて「それだけやないよ。今回はこの『夜天の書』に特別に！」

スバル「特別に！？」

はやて「サービスでもう１個『夜天の書』を追加や！」

スバル「これはお得ですね、八神部隊長！」

はやて「お問い合わせ諸々の電話番号はＸＸＸ－８１０－８１０。数量は限定１００個やからお早めに頼みますよー♪」

スバル「早速注文しないと！」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

咲夜「ちょっと待った！はやてさんとスバル何やってんですか！？何だあの微妙なインチキ通販番組的ＣＭは！？てか夜天の書が何で複数あるんだよ！」

リヒト「騙されてるのか悪ふざけなのか……どっちにしても大問題かも」

ヴァッサー「何で更に問題増やすんだよあの２人……。モント、先に進めてくんない？」

モント「わ、分かりました……」

〜解体！ゲストはこんな人！〜

モント「えー……このコーナーはですね、このラジオに参加して下さるゲストの方への質問コーナーです」

ヴァッサー「じゃあ読むよ。このお便りは、某魔法学院の床下にお住まいのＲＮ：自称仙人（笑）さん……今日２回目か。
『ゲストの方は、もしも『一度だけ誰かに命令を強制できる力』を手に入れたら何をしたいですか？』
成程……中々良い質問だね」

咲夜「俺は……そうだな、澪のヤツに『本を凶器にするのを止めろ』って所かな」

モント「それは聞くだけで痛えですね……つぅかあのオバさんそんな凶こ（ドスッ）ゴハッ！！！」

咲夜「スナイパーライフル！？おいしっかりしろクソチビ！不運チビ！」

ヴァッサー「このドサクサにボロクソ言うとか容赦無いね……つぅか2キロ先から狙うとかドコの遠見〇矢だよ……」

レフィリア「我としては澪殿以前に、2キロ先が見えるその視力や何故『蒼穹の〇ァ〇ナー』を知っているのかと言う事も気になるのだが」

ヴァッサー「視力に関しては生まれつきで、フ〇フナ〇に関しては全部ＴＡＴＳＵＹＡで借りて観たからだよ。剣司は本当に辛い中良くやったよ……」

レフィリア「確かに剣司も頑張ったが、乙姫（つばき）も……くうっ……」

咲夜「おい、話が脱線してるぞ。蒼穹トークなんかしてないでリスナーさんからの質問に答えろ」

レフィリア「おお、そうであったな……。我の場合は……主やヴォルケンリッターに『我を大事に扱え』と言った所か」

リヒト「そんなに扱いが酷いの？」

レフィリア「酷いなどと言うレベルなものか！主は我が心配して抱き着いたと言うのにぐりぐりで返すし！シグナムは目が合う度にバトルを挑んで来るし！ヴィータは我のアイスを勝手に食べるし！シャマルは未元物……じゃなかった未元料理（ダークマター）の味見をさせるし！ザフィーラは犬だし！」

咲夜「待てコラ馬鹿融合機。１億歩譲って俺達の扱いは認めるとして最後のザフィーラは唯の悪口じゃねえか」

リヒト「私の所のヒンメルリッターから聞いてた話とピッタリ過ぎかも。一緒にデビューしてから１０年経ってるのに変わってないんだね……」

ヴァッサー「普通少しは変わるよねえ……」

モント（額から滝の様に流血している）「まあ、あのキャラが確立してるからこそ大人気なんでしょうけどねえ。……っつぅ訳で自称仙人（笑）さんの質問の答えですが、

咲夜→知り合いに『本を凶器にするのを止めろ』

レフィリア→咲夜とヴォルケンリッターに『自分を大事に扱え』

だそうです」

咲夜「いや、まず血を止めろよ。何でドコぞの一方さンみたくなってんのに平気でお便り読んでんだよ」

モント（絆創膏を貼りながら）「それが僕のチート能力だからですよ。じゃあ最後のコーナーですね……頼むからマトモなの

であって下さいよ」

～告白！私の実体験！～

リヒト「このコーナーはリスナーの皆が最近感じた事を発表して、それについて司会進行とゲストの皆で話すコーナーだよ」

ヴァッサー「これは流石にブッ飛んだのは来ないだろうね……私らが捌き切れるかどうかが問題だけど。まず最初のお便りはＲＮ：さすらいの駄文召喚士さん。

『最近ゲーム屋に行ってみたら、時代を風靡したアクションやＲＰＧよりも、ギャ●ゲーのほうが高いなって…（古いのでも時代の流れってやつなんですかねぇ…（ヲタク的な（ｒｙ

そしてなぜか、自分が欲しかった某６４のソフトの中古が税込み約３４００イェン。

普通のＰＳＰのソフトよりもたｋ（ｒｙ』

……さすらってんのにゲーム買うの？」

リヒト「中古で３４００円はぼったくりかも……一体そこの店長はどう言う判断でそんな値をつけたのかな？」

咲夜「流れだとしたらすげえ嫌だな……アクションとかって流行らねえのかな……」

モント「駄作製造機とこないだゲームの事で話した時、アクション

は苦手だけどＲＰＧは好きだっつってましたけどね」

ヴァッサー「それはアイツが奇特なだけじゃないの？アクションはどうか知らないけど、ＲＰＧって身も蓋も無い言い方するとレベル上げとかの作業に使う時間が１番長いだろ？その辺で根気の無いヤツは投げるから、最近売れないのも無理からぬ事だと私は思うんだよね……。あのファイナルファンタジーだって７辺りから人気が下降気味らしいし」

咲夜「それは知らなかったな……」

レフィリア「大体ゲームだと言うのにＣＧだのアニメーションだのばかり凝る風潮も我は納得がいかん。そんな物はどうでも良いから内容をしっかり作れと言うのが何故理解出来んのだ」

モント「おーい、何でスイッチ入っちゃってんですか？」

レフィリア（後ろに何か黒い影が見える）「この際言わせて貰うぞ！ＣＧとかフルボイスなぞどうでも良い！内容を……もっと熱く燃えられてかつしっかりした内容のゲームを作れ！ベタでも構わん！寧ろゲームクリエイターはベタが何故ベタと呼ばれているのかをしっかり考えろ！」

モント「何か乗り移ってんですけど！しかも思っクソメンド臭えのが！」

リヒト「えい！（噛み付き）」

レフィリア「！？痛っ！痛い痛い痛いッ！！！いきなりゲストに何をする！！！（怒）」

咲夜「おお、憑き物が落ちた。凄い噛み付きだな」

ヴァッサー「いっつもトーマが悶絶してるのはコレか……見てるだけで頭蓋骨が割れそうだよ（汗）」

リヒト「やっぱり噛み応えがイマイチかも……」

レフィリア「そこになおれ！貴様はココで成敗してくれる！」

モント「……取り敢えずあの2人は放っときましょう。次に行きますよ……えーと……ハァ？」

咲夜「おい、どうした？」

モント「いや、何でもねえです。八神家の床下にお住まいのＲＮ：ボン太郎さんからのお便りですね。

『去年の話なんですが……友人とリリカルなのはの劇場版を見に行ったんです。そしてその帰り、駅のホームに降りようとして偶然見かけた蕎麦屋に……なのはがいたんです！　バリアジャケットを着たなのはがいたんですよ！

……何故かメチャクチャ厳つかったんですけど』

……」

全員「……」

リヒト「新手の精神攻撃？」

モント「まあ……そんなトコでしょうね……。それ以前に蕎麦屋にあんな目立つカッコで……ハートが異様に強い気がすんですけど」

レフィリア「フェイトの格好よりはマシな気がするが、それでも……な。所で主はどうしたのだ？先程から姿が見えぬが」

ヴァッサー「お便りを聞くや否やすっ飛んで行ったよ。今頃八神家の床下が惨劇になってんじゃないの？」

レフィリア「い、いかん！取り敢えず我と主の出演しておる作品の宣伝を！

『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　闇を切り裂く者』

少年、東条咲夜は火事から助けてくれた八神はやてとその守護騎士を見て自分もこの人を守る騎士になりたい、と思った。それから四年後、咲夜は二人の仲間と共に機動六課に舞い降りる！あの人の騎士になりたい、という気持ちを胸に秘め。

今は過去（Ａ’ｓ）編の最中で我が大活躍しているぞ」

モント「はい、ご苦労さ「早まるな主ィィィ！！！！」行っちまいましたね……」

ヴァッサー「終わる前にゲストがいなくなるラジオってどうよ……。

スタッフ、次はお便りのチョイスを考えなよ」

モント「じゃあそろそろ時間ですし、この番組に関する説明です。この番組『禁刃のラジオ　～大戦の舞台裏～』ではリスナーの皆さんからのお便りを絶賛大募集しています。

コーナーは、

『質問！禁断の刃！』

僕達『王佐の刃』が総出演しているドラマ『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～禁断の刃～』についての質問コーナーですね。勿論個人的な質問も受け付けてます。

『解体！ゲストはこんな人！』

このラジオに参加して下さるゲストの方への質問コーナーです。

『告白！私の実体験！』

リスナーの皆さんが最近感じた事を発表して、それについて司会進行とゲストの皆さんで話すコーナーです。基本的な常識に沿っていりゃあ、別にどんな内容でも構いません。

取り敢えず今の所はこれだけです。これ以外にも普通のお便りも受け付けてんで、どしどし応募しちまって下さい……今はお便りが全然来なくて次が始められねえ状況なんで……」

リヒト「因みに次回のゲストは、『魔法少女リリカルなのはＳｔｒ

ikerS Another』から『天城ナツキ』と『天城ユキ』の2人がゲストで出演するんだよ！」

ヴァッサー「司会は……『銃のドンナー』と『杖のシュネー』、それと『爪のブルート』か。私が言うのもアレだけど、ヤバイのが揃ったね」

モント「まあお便りさえ揃や何とかなんでしょう。次回が何時かは分かりませんがね」

リヒト「それじゃあ今日はココまで。司会は私『魔本のリヒト』と」

ヴァッサー「『海月のヴァッサー』」

モント「そして、『大斧のモント』と

（炎）イノケンシガレット

（聖）神裂ジーンズ

（天）クワガタサッカークラブ

（槍）天草おしぼり

（馬）スチュアート日本語学校

でお送りしました！

……（馬）って何ですか……」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

～～～～～～～～～～～～

禁刃のラジオ　～大戦の舞台裏～の募集要項

ゲスト出演条件

1．『最低１０話以上』進んでいる作品で、作品での立ち位置が明確なキャラ。

2．リリカルなのはの二次創作。但し、そうでなくても作者が知っていれば出せます。

3．最低2ヶ月以内に更新している作品

4．上記の条件を満たした上で、メッセージで出して欲しいキャラクターについて送って下さい！

お便りコーナー

1．送るのはメッセージ、若しくは感想でお願いします。

2．住所（勿論架空の物でお願いします）・ペンネーム・送るコーナーのタイトルとその内容を書いてムーギネーターのメッセージボックスへ。

3．荒らしや中傷など、非常識な物以外なら下記のコーナーのお題とは関係の無い普通のお便りでも受け付けます。

コーナーのタイトル

『質問！禁断の刃！』

本編『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～禁断の刃～』についての質問コーナーです。本編の内容や登場キャラクターへの質問について司会進行が答えます。

『解体！ゲストはこんな人！』

このラジオに参加して下さるゲストの方への質問コーナーです。

『告白！私の実体験！』

リスナーの皆さんが最近感じた事を発表して、それについて司会進行とゲストの皆さんで話すコーナーです。

この他に、コーナーについても募集しています！どしどし御応募下さい。

『お便りが本当に少ないのでお願いします（汗）』

第2回「とある銀刀と狂気魔女（ジーニアス）」（前書き）

前回より長いですがクオリティが……

感想や指摘があれば下さい！

第2回「とある銀刀と狂気魔女（ジーニアス）」

シュネー「おい」

ブルート「何？」

シュネー「最近あのクソ馬鹿、やけに台本の執筆速度が早くねェか？相変わらず内容はまるでねェがな」

ブルート「ああ、アレね。声優に小○水亜○っているだろ？」

ドンナー「○ウレカのア○モネとか○アスのカ○ンとかの声優やってる人よね。確か駄作製造機の好きな声優さんだっけ？」

ブルート「そうそう。んで、その声優が最近『とある○術の禁書○録』のゲームやプリ○ュアにも出てたから機嫌が良いってだけなんだよ」

シュネー「くっだらねェ……良くそンだけでやる気になれンな。アニメは内容が全てだろォがよ」

ブルート「たださ、それが正直問題なんだよね」

シュネー「あァ？どォ言う事だ？」

ブルート「アイツ、私ら放置して別の作品書こうとし「よし、野郎の歯と顎と舌を磨（す）り潰して来る」待て待て待て！」

ドンナー「アイツ殺したら私達の仕事が無くなるじゃない！取り敢

えず落ち着け！」

シュネー「……チッ（座る）」

ブルート「まあ正直アイツにはネタを生み出す想像力もそれを文章にする文章力も無いから杞憂に終わるだろうさ」

ドンナー「書けても精々が短編だろうしね……っと、そろそろ始まるわね」

禁刃のラジオ　～大戦の舞台裏～　第２回「とある銀刀と狂気魔女（ジーニアス）」

ドンナー「こんにちは。今回の司会はこの私、１回負けたけどパワーアップして再登場した『銃のドンナー』と」

シュネー「延べ２０万人の視聴記念に放映したスピンオフで主役をやった『杖のシュネー』」

ブルート「そして、ドラマ本編のゲストの１人と親戚な『爪のブルート』の３人で進行するよ」

シュネー「にしてもよォ、こンなしけたラジオに出演希望出してるヤツがどっさりいるっつゥのは本当に意外だよなァ」

ブルート「同感だね……。でも正直その人達はウチの駄作（バカ）製造機を信頼してくれてる訳だから、それに関しては感謝してもし切れないよ」

ドンナー「今はそんな人達の期待に精一杯応えないとね……じゃあ今日のゲストを呼ぶわね。（カンペを読みながら）……今日のゲス

トはこの2人！銀の刃で敵を絶ち！愛する者の世界を守る！唯一の敵は自身の鈍さな、『天城ナツキ』と！」

ブルート「（カンペを読みながら）この才覚は神からの贈り物？最早並べる者は無し！神すら屈する世紀の天才、『天城ユキ』！」

ナツキ「前回のを聞いてて覚悟はしてたけど、こう言うのっていざ言われると結構恥ずかしいんだな……。と言うか俺は勘には自信があるんだけどなぁ……」

シュネー「あンだけ派手にやっといて気付いてねェのかよ……こりゃァ筋金入ってンな」

ユキ「アンタも似た様なモンだと思うけど……あ、ブルート。控え室のお菓子ありがとね」

ブルート「どう致しまして。口に合ったみたいで正直安心してるよ」

ドンナー「へえ、どんなお菓子なの？」

ブルート「（ニヤリ）ああ、コレだよ（白衣のポケットから包み紙入りの菓子を取り出してドンナーにパス）。正直余ってるしやるよ」

ナツキ「お、おい……それってまさムグッ！？」

ユキ「お兄ちゃんストップ（口を押さえる）」

ドンナー「ありがとう！へえ、チョコレートかあ……（パクッ）。……（顔を青くして卒倒）」

ナツキ「ぷはッ……！お、おいドンナー！大丈夫か！？」

ドンナー「く、口が……喉の中で甘さが荒ぶる調べを爪弾いている……！」

シュネー「どンだけ甘くしたンだよ……ウチのクソガキでも喰えねェンじゃねェかこの毒物……」

ユキ「え？割とさっぱりした甘さだったけど？」

ブルート「ユキ、正直世間一般の常識として一口で喉が灼ける物の味に『さっぱりした』って枕詞は付けないよ……」

ドンナー「み、水……（ガクッ）」

ナツキ「ス、スタッフ！早く水頼む！」

～暫くお待ち下さい～

ドンナー「ひ、酷い目に遭った……！と、当分チョコ要らない……」

ナツキ「（背中を摩りながら）無理な様なら休んでた方が良いぞ。無理して倒れたら元も子も無いしな」

ドンナー「あ、ありがとう……もう大丈夫だから……」

シュネー「オイ、さっさと最初のコーナーを始めンぞ。何時までもリスナー待たせンのは流石にマズイからな」

ブルート「だね。それじゃシュネー、最初のコーナーの紹介頼むよ」

～質問！禁断の刃！～

シュネー「このコーナーは、ドラマ『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～禁断の刃～』についての質問コーナーだ。早ェ話が馬鹿な駄作製造機のせいで生じた疑問を解決するためのコーナーだな」

ブルート「正直簡潔に言うとそう言う事だね。今日最初のお便りは八神家の……」

ナツキ「どうし……何だコレ（絶句）」

シュネー「血で汚れて読めねェな……。ＲＮは……ボン太郎か。

『モントくんってニートなんですか？　ニートだよね？　ニートなんだよね？　あ、幹部皆さん。モントくんが暴れた場合……頑張ってくださいね☆』

……コイツは限り無く唯の挑発だな。取り敢えず応募者は生きてンだろォな？」

ブルート「取り敢えずアイツの携帯（時価４００万）に掛けてみるよ……あ、もしも……」

モント（電話）「アァイテムなぞぉ使ってんじゃぁぁぁＮＥＥＥＥＥ！！！」

（何かナマモノを叩き潰す音がする）

ブルート「（携帯の電源を切って）お取り込み中みたいだね……」

ユキ「（スルーして）そう言えば『彼』って由緒正しい王族の血統なんだっけ？専用機で外遊してるのをテレビで放送してたけど」

ドンナー「ええ、確か今年で建国２０００年だって言ってたけど」

ナツキ「良くそんなに王朝が続くな……普通途中で革命とかが起こって倒れそうなモンだけど」

ブルート「そこは王や大臣の頑張り次第じゃないの？正直生活に不満が無ければ文句なんか出ない訳だしさ」

シュネー「話を戻すぞ。個人的には『王族』は職業とは言わねェと思うが、少なくとも何の義務も果たさねェ『ニート』とは別モンだってのは断言出来る。連中にしてみりゃァ生活そのものが常に国の『品格』だの何だのの評価に直結してやがるからな、常にそォ言ったモンを崩さねェ様に『演じなきゃ』ならねェ訳だ。まァ、あのチビがその責任をちゃンと果たしてるかどォかは知らねェがな」

ナツキ「俺も同意見だな。休む間も無く神経を磨り減らしてる人間にニートって言葉は酷な気がするよ」

ドンナー「そうね。と言う事でボン太郎さんの質問の答えは、

『ニートじゃない』

って事で」

ブルート「じゃあ次は……機動６課隊舎の女子更衣室の天井にお住

まいのＲＮ：普通の人さんからだね……。そこに住んでる時点で普通じゃない気がすんだけど……。

『ドンナーさんは雷を操ってるみたいですが、日常生活で何か困った事とかありますか？
例えばテレビを見ようとしたら、間違って雷流しちゃってぶっ壊したとか。
ゲームをやろうとして壊しちゃったとか』

ドンナー、どうなのさ？」

ドンナー「お便りの通りよ……。４日前は所属事務所のパソコン壊して怒られるし、３日前は１０台目の冷蔵庫が壊れて中の生ものが全部ダメになったし。一昨日は３０台目の自分のパソコンが壊れて中に保存してたデータが全部飛ぶし。昨日なんか２０台目の携帯電話が壊れて登録してたメルアドが全部パァになったし……。……ハァ、不幸だ……」

シュネー「不便以外の何モンでもねェな……つゥかよォ、そンなンじゃァデバイスもヤベェンじゃねェか？」

アルゲマイン（ドンナーの拳銃型デバイス・ＣＶ：伊○か○恵）「あ、それなら大丈夫ですよ～♪私はドンナーさんの為に造られた特別製で、自分の内部に流れた電撃を魔力素に変換して空気中に発散する事でダメージを受けない様にしてるんです。だからドンナーさんがどれだけ電撃を放っても、私には全くダメージが無いんです」

ナツキ「そうなのか……。しかし凄え滑らかな声だな……ホントにデバイスの音声なのか？」

アルゲマイン「えへへ、ビックリしました？ってうわあッ！？バ、バラバラにしようとしないで下さいよぉッ！！！」

ユキ「（アルゲマインを片手に持ちつつもう片方の手でスパナを持ちながら）良いじゃない、別に減るモンじゃなし」

アルゲマイン「明らかに減りますよッ！！！」

ブルート「ユキ、コイツの設計図なら後で渡すから勘弁してやってくんない？」

ユキ「ちぇー（ペチッ）痛ッ！」

ナツキ「当たり前だアホ。人様のデバイスを解体（バラ）そうとすんな」

アルゲマイン「あー……怖かったぁ……。生きた心地がしないですよ……」

ナツキ「悪いな。バカ妹が迷惑掛けてさ……」

アルゲマイン「い、いえいえ！ナツキさんが謝る事無いですよ！」

ブルート「正直シュールな絵面だね……」

ドンナー「う、うん……。と言う訳で普通の人さんの質問の答えだけど、

『私の身の回りの殆どの電化製品がすぐに壊れる事』

が私の困る事よ」

シュネー「じゃァCM挟んで次のコーナー行くぞ」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～

あの八神はやても登場した、１０作目の『ツッコンではいけない管理局』のＤＶＤ・ブルーレイ化が決定！

歴代最高を誇る刺客達を相手に、５人は生き残る事が出来るのか!?

初回限定版は未公開映像とレリックが特典として封入されて何と驚きの特価１２６００！

なのは「オ・ハ・ナ・シ・カ・ク・テ・イ・な・の」

(悲鳴が聞こえる)

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～

ナツキ「なのは……何やってんだ……」

ドンナー「まさか吊るされてるコンニャクにナタデココが混ざってる事に突っ込んだ瞬間に出て来るとは思わなかったけど……」

ブルート「観てない人にはシチュエーションがさっぱり分かんないんだけど。と言うかあの番組に６時間も掛けるのは正直どうよ……中弛み必至なんじゃない？」

シュネー「まァ方向性を見失ってねェ分、裏の歌合戦よりはマシだろォがな。ナカジマ&ランスターのどつき漫才が間に入ってたのを観た時は即チャンネルを変えたぜ」

ユキ「視聴率低迷してプロデューサーが訳分かんなくなってる証拠ね……『禁断』はそんな事が無い様にしなさいよ」

ドンナー「そんな事になったら処け……いや止めるけど、あの馬鹿の事だからね……」

ブルート「ハァ……気を取り直して次のコーナーに行くよ」

〜解体！ゲストはこんな人！〜

ブルート「このコーナーはこのラジオに参加してくれてるゲストの方への質問コーナーだね」

ドンナー「じゃあ読むわね。お便りは、奈落の落とし穴の奥底にお住まいのＲＮ：この世界（フィールド）から除外された駄文の申し子さん……遊戯王？

『もしナツキさんが絶体絶命の時、ユキさんはどうしますか？』

ユキ、どうなの？」

ユキ「そんなの答えるまでもないじゃない、『放っておくわよ』。お兄ちゃんなら大抵の事は何とか出来るからね」

シュネー「ヘェ」

ユキ「何か間違ってる？」

シュネー「いィや、その逆だ。最近はべったり張り付くのを『信頼』だとか『仲間』の証とやらと勘違いしてる馬鹿がゴマンといやがるから却って新鮮に感じた位だ」

ナツキ「……」

ドンナー「アレ？ナツキ？」

ブルート「そう言えばアンタは寧ろ逆だよね。まあアンタの場合なのは達の無理を見かねて肩代わりしてるだけだから、シュネーの言ってるのとは微妙に違うけどさ」

ナツキ「仕方無いだろ、アイツらを放っておくとか俺にはどうしても出来ないんだから……」

ブルート「分からないでもないけど……。機動６課の面子って悉く熱心過ぎんだよ……。前なんか朝６時の集合だって言ってんのに４時に入ってたからね……」

ナツキ「道理で隈が出来てた訳だ……後でしっかり言っておくよ……」

シュネー「キツく言っとけよ。主役陣が倒れちゃ話にならねェンだからな」

ブルート「集合時間に２時間遅れて来た事があるアンタが言うなっつーの。……しかも２０万ＰＶ記念のスピンオフで主役張った時に堂々と遅れてさあ」

ユキ「流石にそれはマズイんじゃないの？」

シュネー「一緒に出てたあのクソガキが迷子になったンだから仕方ねェだろ。ったく、近道だからって中華街なンか通るンじゃなかったぜ……」

ナツキ「最近クラナガンの一角に出来たアレか？」

シュネー「あァ。前日ルートを調べてコレなら1番早く着くと思って移動したのによォ……それをあのクソガキ、珍しい肉まンに見とれやがって……」

ナツキ「あの子なら仕方無い気もするけどな。収録途中に会うけど何時も元気だし」

シュネー「面倒臭ェだけだ。……追っ払う気も失せるがな」

ブルート「はいはい、そう言う訳でこの世界(フィールド)から除外された駄文の申し子さんの質問への答えは

『放っておく』

だそうだ。それじゃCM挟んで次のコーナーに行くよ」

〜〜

ウーノ「ドクター！本気なんですか！？」

スカリエッティ「私は何時でも本気だよ」

ウーノ「ですが『聖王のゆりかご』を『ＳＯＹ』って、略になってないでは……」

スカリエッティ「分からないのかい？『ＳＯＹ』……何かカッコイイだろ？」

これさえ乗れば君も無敵！聖王のゆりかご、絶賛試乗体験中！

今なら購入者全員にガジェット？型１００機を漏れなくプレゼント！

ウーノ「ええー」

お近くの最高評議会に急げ！

〜〜〜

ブルート「（頭を抱えながら）…………あの馬鹿、何やってんだ…………」

ナツキ「『お近くの最高評議会』って何だよ……つーかゆりかごとガジェットどんだけあるんだよ」

ドンナー「ツッコミ所が多過ぎて処理出来ないわね……次行くわよ」

〜告白！私の実体験！〜

ドンナー「このコーナーはリスナーの皆が最近感じた事を発表して、

それについて司会進行とゲストの皆で話すコーナーよ」

シュネー「最初のお便りは夜天の書の隙間に住んでるＲＮ：ヘタレ虫……住めンのかアレ……？

『最近は行けていないんですけど某アニ〇イトとかで床にアニメキャラのポスターとか貼ってあるんですが、あの上を歩くのに未だに抵抗があります。自分にフェイト&なのはを踏めと？
　なんというか絵踏み的な背徳感をバリバリ感じるのはおかしいんでしょうか？』

成程なァ……」

ナツキ「アレか……確かにあんまり良い気はしないな」

ドンナー「秋葉原とかだと駅の床広告とかにもそんなのがあったっけ」

ユキ「何も床に貼る事無いでしょ、って思うけどね。まあ宣伝する物が多過ぎて貼る場所が無いって言うのは分かるけど」

ブルート「正直それって最近のクリエイターとか、制作会社とかテレビ局の態度が原因だと思うんだよね」

ナツキ「？どう言う事だ？」

ブルート「例えばさ、ちょっと人気になったラノベとか漫画をすぐに深夜アニメにしたりするだろ？アレがいけないんだよ。ウケてるってだけで始めるから即原作のネタが尽きて安直に萌えに走ったり、触りだけで終わって『続きは原作で』みたいな駄クオリティのアニ

メが氾濫するんだよ」

ユキ「それは言えてるわね……深夜アニメとかは1クール13話で終わるけど、そんな容量でラノベをアニメ化なんて明らかなネタの過積載だろって話よね」

シュネー「こォなると唯のありがた迷惑だな。つゥか別にアニメに限らねェぜ。最近はドラマや映画のジャンルでも実写化とかリメイクだとかホザいて楽をしてやがるクリエイター（笑）がワンサカいやがるからな」

ナツキ「まあ俺達もあんまり言えた立場じゃないけど、反面教師として『ああはなるまい』って心掛けないとな」

ドンナー「そうね。じゃあ次のお便り行くわね。えーと、奈落の落とし穴の奥底にお住まいのRN：この世界（フィールド）から除外された駄文の申し子さん……今日2度目ね。

『最近小さな事で項垂れる事が多いです。皆さんはどんな事で落ち込んでしまいますか？　因みに自分はせっかく更新したのにお気に入り件数が減る事です』

……これは結構キツイわね」

シュネー「あの馬鹿はそォ言うのは基本堪えねェらしィがな。唯最近キツイ言葉にガチで凹（へこ）ンで取っ払ってた感想制限を付け直したみたいだな」

ブルート「『一体何がしたいの？ぶっちゃけ途中で読む気無くした』ってヤツだっけ？正直それが普通の評価だと思うけどね」

ナツキ「いや、それは普通凹むだろ。つーかわざわざ『読む気無くした』なんて書くとか明らかなマナー違反じゃないか」

ドンナー「そうだと思うけどね……ところで皆は最近落ち込んだ事ってあるの？」

シュネー「俺はねェな。落ち込ンでたって事が解決する訳じゃねェンだ。それ位ならどォすりゃ良ィかを考えンのが建設的な態度なンじゃねェか？」

ユキ「アンタの言う通りね。人生なんて１０個の物事の内１個でも思い通りに行けば良い方なんだから」

ナツキ「バッサリだな……俺はフェイトに頼まれてた番組の録画忘れた時かな。ユキが録画してなきゃってゾッとしたよ」

ドンナー「私は借りて来たＤＶＤが傷だらけで途中の良い所から全く観られなかった事かな……」

ブルート「アレはキツイね……私は新しい巻出てると思って既に持ってる漫画を買って来た時かな。思わず『糠喜びかよ！』ってツッコんだけど」

シュネー「微妙に某ギャグ漫画でネタにされてた通りの体験してどォすンだ。つゥか凹む事なンざ実社会じゃそこかしこに転がってるっつゥ良い見本だな」

ドンナー「何か身も蓋も無いわね……次のお便りで気持ちを切り替えよ！えーと、機動六課隊舎の女子更衣室の天井にお住まいのＲＮ：

普通の人さん……この人も今日2度目ね。

『この前偶然、同僚の女性の着替え現場に遭遇してボコボコに殴られました。
D以下の胸の女に興味無いから安心しろって言ったら、更に殴られました。
巨乳には夢が詰まってるけど、貧乳は夢を与えた結果だから気にするなと慰めたら、顔の形が変わるまで殴られました。
俺、悪くないよね？』

……宜しい、ならば戦争DA（お便りを黒焦げにした上でデバイス展開）」

ユキ「サポートはするわ。存分にぶちかましなさい（黒笑）」

ドンナー「来なさい！聖王正教特務部隊！このお便り送ったヤツに雷の咆哮を聞かせて原子レベルまで分解してやるわ！」

（スタッフの野太い声が響き渡る）

ユキ「甘いわドンナー！塵1つ残さず消滅させるべきよ！」

（2人がスタジオを飛び出す。そしてその後を黒尽くめのムサイ集団が着いて行く）

ブルート「ドコの八卦衆だよ……つかアレ特務部隊じゃなくてウチのスタッフじゃない」

ナツキ「待て待て！ドコの世界にあんな特殊部隊みたいなスタッフがいるんだよ！」

シュネー「確か、『巨乳及び巨乳崇拝者抹殺部隊』とか抜かしてやがったな……。つぅか今回はＭＣまで番組の途中で脱走かよ……」

ブルート「開き直ってこれがこの番組の特長って事にすんのも正直悪くないかもね。……っと、そろそろ時間か。ナツキ、頼むよ」

ナツキ「ああ、俺とユキが出てる作品を紹介するよ。

『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　Ａｎｏｔｈｅｒ』

少女は、絶望の中一筋の光を見た。少女は、最狂と最悪の出会いをした。少女は、ただ己の目標を実現させるべく人の道を捨てた。少年は、閉じ行く運命を切り開こうとした。そして十年の時を経た四人の少女と青年は、一つの想いを胸に新たな舞台へと上がる。これは、海鳴市から遠く離れた場所で紡がれる、もう一つの物語。四年の時を経て憧れの人と再会した少女と、その仲間達の成長と。三人の少年少女と、対を成す三人の始まりのお話。桜と金と白銀は、翼を広げ空へと上がる。悲しみから産み落とされた三人を、全力全開で助ける為に。ここにいていいんだよって、伝える為に。魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　Ａｎｏｔｈｅｒ、始まります。

魔法少女リリカルなのはＡｎｏｔｈｅｒシリーズの３作目だな。俺達以外にも色んなキャラクターが活躍するぞ」

ブルート「お疲れ様。今日はありがとね」

シュネー「スケジュールが合うなら何時でも来い。どォせがら空きだろォからな」

ナツキ「ああ、じゃあな（退室）」

ブルート「じゃあ、この番組に関する説明をするよ。

この番組『禁刃のラジオ　～大戦の舞台裏～』ではリスナーの皆んからのお便りを絶賛大募集してるんだ。

コーナーは、

『質問！禁断の刃！』

私達『王佐の刃』が総出演しているドラマ『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～禁断の刃～』についての質問コーナーだね。勿論個人的な質問でも構わないよ。

『解体！ゲストはこんな人！』

このラジオに参加して下さるゲストの方への質問コーナーって所だね。

『告白！私の実体験！』

コレはリスナーの皆が最近感じた事を発表して、それについて司会進行とゲストの皆で話すコーナーだね。誹謗中傷とかじゃなければ、別にどんな内容でも良いよ。

取り敢えず今の所はこれだけだ。これ以外にも普通のお便りも受け付けてるから、どしどし応募してよ！」

シュネー「次回のゲストは、『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋ

ｅｒＳ　護るための力を持つ者』から『コルト＝リバティ』と『ブルズ＝アルフィード』の２人だな」

ブルート「司会は……『刃鞭のエルンスト』と『ゼリガン＝ヒューイット』、それと『双棍のヴィント』か。……進行出来るの？」

シュネー「俺が知るか。まァエルンストの腕次第じゃねェのか？」

ブルート「それもそうか。じゃあ今日はココまでだね。司会は私『爪のブルート』と」

ドンナー「（息を切らせながら）ハァ……ハァ……ア、アイツ逃げやがって……『銃のドンナー』」

シュネー「そして、『杖のシュネー』と

（愛）ブシドー日本講座

（幸）コーラサワー保険

（人）超人機関

（狂）ハレヴィ製薬

（貧）イスマイールミュージックエンターテイメント

の提供で放送したぜ！

……ＯＯか？」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～

禁刃のラジオ　～大戦の舞台裏～の募集要項

ゲスト出演条件

１．『最低１０話以上』進んでいる作品で、作品での立ち位置が明確なキャラ。

２．リリカルなのはの二次創作。但し、そうでなくても作者が知っていれば出せます。

３．最低２ヶ月以内に更新している作品

４．上記の条件を満たした上で、メッセージで出して欲しいキャラクターについて送って下さい！

お便りコーナー

１．送るのはメッセージ、若しくは感想でお願いします。

２．住所（勿論架空の物でお願いします）・ペンネーム・送るコーナーのタイトルとその内容を書いてムーギネーターのメッセージボックスへ。

３．荒らしや中傷など、非常識な物以外なら下記のコーナーのお題とは関係の無い普通のお便りでも受け付けます。

コーナーのタイトル

『質問！禁断の刃！』

本編『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～禁断の刃～』についての質問コーナーです。本編の内容や登場キャラクターへの質問について司会進行が答えます。

『解体！ゲストはこんな人！』

このラジオに参加して下さるゲストの方への質問コーナーです。

『告白！私の実体験！』

リスナーの皆さんが最近感じた事を発表して、それについて司会進行とゲストの皆さんで話すコーナーです。

この他に、コーナーについても募集しています！どしどし御応募下さい。

第3回「馬鹿と空気とドS女王」（前書き）

2ヶ月以上放置して済みません！

感想や指摘があれば下さい！

第3回「馬鹿と空気とドS女王」

エルンスト「……」

ヴィント「エルンスト、どう、したの？」

エルンスト「……2ヶ月」

ヴィント「は？」

エルンスト「前回の放送から今回までの期間だけど。あの馬鹿、不定期更新の前言い訳とモチベーションの低下を理由にココまで放送を遅らせて……！　万回八つ裂きにしても足りない大罪だけど……！」

ヴィント「気持ちは、良く、分かるけど、落ち着いて。その鞭を、振り回したら、スタジオが、あの馬鹿同様、修繕、不可能な、状態になって、番組自体が、打ち切られるから」

エルンスト「チッ……。そう言えばもう1人の馬鹿は？　確か今回のMCが決まった時に涙と鼻水流して泡吹いて喜んでダンスしてたって聞いたけど」

ヴィント「アイツ、なら、あっちに……」

エルンスト「は？　外？」

ゼリガン（スタジオ外）「よおおおおおおし！！！　やっとこの日が来た！！！　燃えよ魂！　スタジオを焼き尽くす程の熱気をこ

の番組を閲覧する全ての視聴者に伝え、共に燃え上がごあッ！？」

（エルンストの振るうスパイクを仕込んだ拷問鞭がゼリガンを何回も殴打）

エルンスト「（超平坦な声で）ウルサイ&暑苦しい&そろそろ時間だから取り敢えず黙れ熱血馬鹿」

ヴィント「物凄く、グロい事に、なってる、わね。ホントに、大丈夫なの？」

エルンスト「コイツが『あの』ヒューイット一族である以上、何の問題も無いけど。斬ろうがマグマの中に突き落とそうが、コイツが死ぬ事など有り得ないけど」

ゼリガン（傷だらけ）「エ、エルンスト……様。１００倍の……重力を……加えた拷問鞭の一撃は、流石に……自分でも……キツイものが……」

エルンスト「ならお前が適度に静かにすれば良いだけの事だけど。取り敢えず無駄に騒ぐ様なら容赦無く制裁を下してやるから心しておく事だけど」

ゼリガン（包帯）「う、うぐ……畏まり……ました……」

ヴィント「流石、ドＳ……。見てる、こっちが、怖く、なるよ……」

エルンスト「それよりそろそろ始まるけど。タイトルコール行くよ」

禁刃のラジオ　～大戦の舞台裏～　第３回「馬鹿と空気とドＳ女王」

エルンスト「こんにちは。今回は私、フェイトルートのボス（予定）の立っている『刃鞭のエルンスト』と」

ヴィント「最初に、やられて以来、サッパリ、空気（エアー）な、『双棍の、ヴィント』。そし」

ゼリガン「好きな食べ物は火鍋！　尊敬する心の師は松岡修造！　座右の銘は七転八起（しちてんばっき）！　自分こそベルカが誇る業炎の騎士、ゼリごぼおッ！！！」

（身体が高重力に因って床に減り込む）

エルンスト「誰がお前の個人的なプロフィールなんか求めたか２５文字以内で詳しく説明を要求するけど。黙ってドラマでのお前のコレまでの出番の解説をしろこの暖房要らず」

ゼリガン（完全に床に身体が減り込んでいる）「ぐご……口の中に鉄の味が……視界が真っ赤で何も見えない……」

ヴィント「エルンスト、流石に、マズイ。外に、待たせている、ゲストが、完全に、ドン引き、してる」

エルンスト「え゛……？」

ゲスト「……」

ヴィント「……」

エルンスト「……スタッフ」

（指を弾くと同時、黒子（某変態淑女に非ず）が数人でゼリガンを減り込んだ床から引っ張り出し、壊れた床を修繕して立ち去る）

エルンスト「さて、今日のゲストを呼ぶけど」

全員「スルー！？」

エルンスト「今日のゲストはこの２人。風の様に軽やかに、しかし意志は何よりも強固！　『優しき守護者』コルト＝リバティと！」

コルト「あ、どうも……」

ヴィント「鉄壁の、守りと、熱き、心！　その身を、盾に、全てを、弾く！　『鉄風の、戦士』ブルズ＝アルフィード」

ブルズ「よ、宜しく……てか無事なのか、アレ？」（床に放置されたゼリガンを指差して）

ヴィント「えと、その……」

ゼリガン（傷だらけ）「自分ならこの通りイイイイイッ！！！」

コルト「だ、大丈夫だったね……（汗）」

ゼリガン（傷だらけ）「申し訳無い２人共！　自分の為に時間を……」

ブルズ「いや、良いから血を止めろって……。滝の様に流れてるぞ（汗）」

ゼリガン（傷だらけ）「何のこの程度！　気合があれば止血出来る！」

ヴィント「アントニオ猪木、か！」

コルト「彼、本当に人間なんですか……？」

エルンスト「取り敢えず、ヤツが人間なのは確かな筋からの情報だけど。尤も、アイツが『ヒューイット家』の出と言う事を鑑みるにその情報には疑問符が付くけど」

ブルズ「ティアナが苦労した訳だ……。アイツ大丈夫かな？　今後対決シーンがあるってのに……」

エルンスト「ティアナには心底同情しておくけど……」

～質問！　禁断の刃！～

エルンスト「このコーナーは、『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～禁断の刃～』についての質問コーナー。ドラマの内容及び、登場する人達への質問について私達司会進行が答えると言う物だけど」

ヴィント「今日の、お便りは……ＲＮ：ウボァーさん、から。皇帝？『禁断の刃の今現在での状況は、どちらが有利なのですか？　教えて頂けると幸いでウボァァァ（ｒｙ』

……フリオニール、まだ、仕留めないで」

コルト「確かにそれは気になる所ですね。実際にはどうなんですか？」

ゼリガン「簡潔に言うと、聖王正教有利と言った所だ。まず聖王正教は初代メンバーの内８人を復活させ、自分達ネオ・ベルカの構成員が抜けた分の穴を埋めている」

ヴィント「要するに、聖王正教側の、幹部が、１２人に、なった、と言う事。私達は、本来、メンバー直参の、参謀の、カイゼムまで、幹部に、数えても、７人しか、いないから、単純な、話、その時点で、不利、なの」

コルト「でも、今クリシェラスではネオ・ベルカが押していますよね？」

エルンスト「それは私達の兵士の質が勝っている事と、クリシェラスが『何者か』に襲撃された事。そして、ヤツらの戦力故に生じた『穴』を突いたからだけど」

コルト「穴？」

ヴィント「確かに、彼らの、戦力は、多い。だけど、それ以上に、敵も、多い、と言う事。彼らは、自分の、目的や、或いは、自分の、楽しみの、為に、あちこちを、襲撃してる。だから、必然的に、あちこちで、起こった、自分達に、対する、レジスタンス達を、潰しに、行く事に、なって、戦力が、分散される訳」

ゼリガン「自分達が彼らに勝つには勢いでその穴を的確に突き、彼らの拠点を破壊する必要があると言う訳だ。……寡兵で巨悪を打ち

倒す……うおおおおおおお！！！　話しているだけで昂ぶってキタアアアアアアアアッ！！！」

エルンスト「バ、バカ！　スタジオ内で炎を出すな！」

ヴィント「あ、熱い！　ロ、ローブに火が！」

コルト「急いで脱いで下さい！　燃え移る前に！」

（番組の途中ですが、スタジオが緊急事態に陥った為に一時放送を中断してＣＭをお送り致します）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

メイリン「お姉ちゃん、その本は？」

ルナマリア「ああコレ？　全世界モノアイ愛好会のシャア＝アズナブル会長執筆の『モノアイと私』の初版よ」

メイリン「これがあの幻の！？」

（ドドーン！！！）

ルナマリア「ええ。モノアイと著者・シャア会長の数奇な運命、会長自らの緻密な解説でモノアイＭＳの操縦法を解説するコーナー。それに巻末付録のダジャレコーナーは爆笑必至！」

メイリン「随分盛り沢山だね……。でもこれだと高いんじゃないの？」

ルナマリア「チッチッチッ。何と上・中・下巻の合計が、何と！
税込み３１５０円！」

（ババーン！！！）

メイリン「うわっ、安い！」

ルナマリア「しかもしかも！　今回購入してくれた人の中で先着１００名様にはシャア会長の独演会＆サイン会への招待券と全世界モノアイ愛好会のプレミアム会員権もプレゼント！」

（ズバーン！！！）

メイリン「これは是非とも購入しないと！」

ルナマリア「お問い合わせ等の電話番号はＸＹＺ―０１０―１００。
皆さん、是非買って下さいね♪」

メイリン「宜しくお願いしまーす♪」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ゼリガン以外全員「はーっ……はーっ……はーっ……はーっ……」

コルト「皆、大丈夫？」

ブルズ「お、俺は何とか……。エルンスト達は？」

エルンスト「このクソ馬鹿！　クソ馬鹿！　クソ馬鹿があああああッ！！！」

ヴィント「し、死ぬかと、思った、じゃない……！　この、大馬鹿……！」

（鞭の音とトンファーで殴打する音が響く）

ゼリガン「も、申し訳ありませんんんんんーーーーーッ！！！！！」

コルト「大丈夫……みたいだね」

ブルズ「……だな」

（またまた、暫くお待ち下さい）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～

エルンスト「見苦しい物を見せて、本当に悪かったけど」

ヴィント「ゴメン、なさい」

コルト「そ、それは大丈夫ですけど……」

ブルズ「今血溜まりに沈んでるアイツは大丈夫なのか？」

エルンスト「壁の染みだと思って放置して欲しいけど。触れると、またそれに呼応して燃え上がりかねないから」

ブルズ「わ、分かった……」

エルンスト「それで質問の答えだけど、

『戦力は聖王正教サイドが有利。但し、やり方に因ってはネオ・ベルカ側にも十分勝機がある位には拮抗してる』

と言う事だけど」

ヴィント「もし、分からない、事が、あったら、その都度、答える、から、遠慮、無く、質問、して」

ゼリガン（流血）「つ、次の……質問は……自分が……。汚名を、挽回……させて頂き……たく……」

コルト「汚名は『返上』する物だと思うけど……」

ブルズ「いや、その前に血を止めろって。どう考えてもとっくに致死量到達してるぞ、洒落やギャグじゃ済まない量出てるぞ」

ゼリガン（未だに流血）「な、何の……！　この程度の逆境……気合で……乗り切って見せる……。次のお便りは……夜天の書の隙間にお住まいの、ＲＮ：ヘタレ虫さん……。そこに……どの様に……住んでいるのだ……？

『ドラマの方でも大乱戦になりつつある戦争ですが、ある種の宗教戦争的な側面もありますよね。というわけで作中で聖王に対する信仰心が一番厚い人って誰ですか？

　というか某トウガラシさん辺りになると別の神さま信仰しちゃっ

てますけど大丈夫なんですかｗｗ…あれ？今は夜なのに空が明る（ハガキが焼け焦げている）』

カイゼム様……リスナーに、手を出す事だけは……」

コルト「それで、誰が１番なんですか？」

ヴィント「それは、間違い無く、エルンストね」

ブルズ「即答なのか？　もう少し迷うかと思ったんだが」

エルンスト「即答で当然だけど。聖王正教幹部の四人である『四天』や彼らと代々付き合いのある『モント』と『リヒト』は、本編では明かしていない事情故に聖王陛下を憎んでいるから信仰心など無い訳だけど」

ブルズ「成程」

エルンスト「ついでに言うと、その点ではカイゼムも似た様な物だけど。アイツの国は元々太陽神『ナルク』を崇拝していたのだけど、オリヴィエ陛下の代には彼女に国を攻められて協力せざるを得なくなったと言う経緯があるのだけど」

コルト「なら何で彼らは聖王正教にいたんですか？　その経緯やあの性格なら、聖王正教にいるのは不自然な気がしますけど」

エルンスト「簡潔に言うと、『聖王正教それ自体がシュヴァルツ達に乗っ取られたから』と言う事だけど。元来聖王正教は初代王佐の刃が離反した後に造られた経緯があるのだけど、今から１５００年程前に『本来の幹部がシュヴァルツ達に始末されて乗っ取られた』

と言う訳だけど」

ヴィント「そこから、先は、シュヴァルツ達が、実力重視で、メンバーを、スカウト、してるって訳。だから、信仰心の、薄い、メンバー、ばっかり、なのよ」

ゼリガン「シュネー様など、教会の屋根にある十字架を投げ付けて敵を制圧した事もあるからな……。いや、アレは凄かった」

ブルズ「それは流石にマズイだろ……って、お前ホントに気合で出血止めたのかよ……。つくづく人間離れしてるな……（汗）」

コルト「なら逆に、何でエルンストさんが信仰心で1番だと断言出来るんですか？」

ヴィント「エルンストは、家族が、下層階級の、信者、だから。元々、一般騎士と、大差無い、レベルの地位から、信仰心と、自身の、力量だけで、この地位に、上り詰めて、いるから」

コルト「そうですか」

エルンスト「と、言う訳で質問の答えだけど。

『信仰心が1番厚いのはこの私、刃鞭のエルンスト』

『某トウガラシが別の神を信仰しているのもアリ』

と言う事だけど」

コルト「そう考えると、随分フリーダムな組織と言うか何と言うか

……」

ヴィント「まあ、駄作製造機が、思いつきで、書いたから、当然と、言えば、当然、なんだけど」

ゼリガン「今更言っても仕方が無い事です。今はこれを教訓に突き進ませるだけです！」

エルンスト「お前の言う通りだけど。それじゃあ次のコーナーに行くけど」

～解体！　ゲストはこんな人！～

ヴィント「この、コーナーは、この、ラジオに、参加して、くれている、ゲストへの、質問コーナー、ね」

エルンスト「なら読むけど。ザッフィーの背中にお住まいの、ＲＮ：ヘタレＺさん……何て所に住んでるの？

『ドラマで見事な盾捌きを見せてくれたブルズさんですが、もしも盾以外のデバイスを使う事があったら何を使いたいですか？』

良い質問だけど。ブルズ、どうなの？」

ブルズ「そうだな……グローブ型、かな」

ヴィント「グローブ、と言うと、ケリュケイオン、みたいな物？」

ブルズ「確かにアレもグローブだけど、イメージがちょっと違うな。俺の言ってるのはアメコミのヒーローとかが使ってる感じのヤツだ

よ。映画にもなった『アイアンマン』とかが近い感じだな」

エルンスト「成程ね……確かにそれなら似合うと思うけど」

コルト「そう言えば……王佐の刃のメンバーは皆武器が特殊なデバイスですけど、手入れとかはどうしてるんですか？　普通のメンテナンスで大丈夫……とは行かなそうですけど」

エルンスト「それが意外にどうにかなるのだけど。通常のデバイスが魔力行使を目的に製造されているのに対して私達のデバイス――『聖霊デバイス』は『魔力素の操作』を目的に製造されているのだけど、実は一部を除いてその構造は只のデバイスと大差無いのだけど」

ゼリガン「尤も、核となるシステムについては専属のマイスターが就いて整備をしているとは自分も聞いている」

ブルズ「そりゃ意外だな。てっきり丸っきり造りが違うと思っていたから」

ヴィント「元々、聖霊デバイスは、通常の、デバイスに、エルデが、改良を、加えて、造った、物だからね。頑丈さを、重視、する為、既存の、デバイスに、手を、加える、事を、考えての、チョイスらしいわ」

コルト「そんな特技あったんですかあの人は……」

ブルズ「カローラさんとデバイス談義出来るだろうな……」

エルンスト「と、言う訳で質問の答えだけど。

『ブルズが盾以外で使いたいデバイスは、アイアンマンの様な感じのグローブ型デバイス』

らしいけど」

ゼリガン「自分なら……ココは槍を……」

ヴィント「それは、お前の、モデルと、被るから、ダメ。……っと、ＣＭに、入るわね」

～～～

～～～

ゼリガン（流血）「気にしたら負けと言う話だ！　次のコーナーを！」

ブルズ「その大出血はフリなのか！？　突っ込めと言うフリなのか！？」

～告白！私の実体験！～

ゼリガン「このコーナーはリスナーの皆が最近感じた事を発表し、それについて司会進行とゲストの皆で話すコーナーだ！　さあ、悩みを解放しろ！」

エルンスト「声のやたらデカイ馬鹿はスルーするとして、お便りを読むけど。ええと……ザッフィーの背中にお住まいの、ＲＮ：ヘタレＺさん……今日２度目か。何時もありがとう。

『そういえば大分前の話なんですが、自室で読書してたんですよ。特にテレビも電源を点けずに静かに読書してたんです。そのはずなのに何故か突然テレビの電源が点いたんです。リモコンは机の上にあるし間違ってボタンを押すなんて事もない筈なんですけど…それだけならともかく番組の内容が……丁度バイオ○ザードで人がエレベーターに挟まって潰されるシーン？だったんです……なんでよりにもよってｏｒｚ』

……何ともホラーな話だけど」

コルト「偶にありますよね、そう言う不可解な話って」

ヴィント「私、なんて、しょっちゅうよ。昨日も、拾った、ビデオを、見てたら、井戸から、女が……」

ブルズ「それ何て呪いのビデオ！？　つかドコからそのビデオを拾って来たんだ！？」

ヴィント「メンド臭いから、女を、ダンボールに、押し込んで、とある、シュヴァルツの、家に、ビデオごと、送り付けたわ」

ゼリガン「シュヴァルツ様アアアアア！？」

エルンスト「ヴィントの話は兎も角、ポジティブに考えると良いかと思うけど。点ける手間が省けたと思えば、得をしたと言う気になれるハズだけど」

コルト「それはまた、図太い発想ですね……」

ゼリガン「何れにしても、気にするから余計に怖いと感じるのだ。ならば気にしないと言うエルンスト様の発想は間違ってはいないだろう」

ブルズ「まあ、な」

ヴィント「と、言う訳だから、ヘタレZさん。気にせず、バイオ○ザードを、楽しむと、良いわ」

エルンスト「じゃあ次のお便りに行くけど。RN：ウボァーさん……何時も感謝するけど。

『遂に自分も就職間際な状態になってしまいました。先行き不安で仕方ないです……。皆さんは何か、不安な事は無いのですか？』

ウチの馬鹿作者にも、これ位切迫して欲しいモノだけど」

コルト「大変ですよね、就活って。僕は今出ている作品中で戦闘中だからそれを無事切り抜けられるかな、って言うのが不安ですね」

ブルズ「山場だから力が入るしな……。3人はどうなんだ？」

エルンスト「私達の不安は3人一緒だけど」

ヴィント「出番が、あるのか、どうか、って事ね」

ゼリガン「作者アアアアア！！！　早く自分に活躍の「グラヴィティプレス」ごばッ！？」

（再び床に減り込む）

エルンスト「それと、あの馬鹿が完結まで書き切れるかどうかも不安だけど。本人はやる気でも、最近はあんな事を言ってた位ハートの弱いヤツだから」

コルト「神経を磨り減らす事って多いですからね……。無理はしないのが1番ですよ」

ブルズ「そうだな……。趣味で精神的に参るのは辛過ぎだしな」

エルンスト「そうだね。まあウチの馬鹿はともかく、キツイならこのサイトで相談するのもアリだけど。1人で抱え込むとロクな事にならないのは明白だけど」

ゼリガン（流血）「悩むな！　悩むならば相談だ！　全て自分にぶ

つけろおおおおッ！！！」

ヴィント「頼もしいんだか、頼もしく、ないんだか、分からない、わね。ん……そろそろ、時間？　丁度、良かった」

エルンスト「コレ以上、ネタが無かったから正にその通りだけど。２人共、宣伝宜しく」

コルト「あ、はい。

『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　護るための力を持つ者』

ミッドチルダでの大規模災害。それに巻き込まれた一人の少女、スバル・ナカジマは一人の魔法使いと一人の少年と出会うことで自分の力を何かを護るために使うことを決心する。　その４年後、スバルは新しく配属された新設部隊＜機動六課＞で自分と似た意思を持つ少年と出会う。

今は地上本部で戦闘中です。山場ですので是非読みに来て下さいね！」

ヴィント「どうも、御疲れ様。また、来てね」

ブルズ「また、機会があったらな」

コルト「どうも、失礼しました」

（２人が退室）

エルンスト「始めて平和に終わった気がするけど。どんなラジオだって話だけど」

ヴィント「それ以前に、良く、進行、出来た、わね……。エルンスト、御疲れ様」

エルンスト「まあ私なら当然だけど。……っと、この番組の説明をしないと。

この番組『禁刃のラジオ　～大戦の舞台裏～』ではリスナーの皆さんからのお便りを絶賛大募集しているけど。

コーナーは、

『質問！　禁断の刃！』

私達『王佐の刃』が総出演しているドラマ『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～禁断の刃～』についての質問コーナーだけど。勿論個人的な質問も受け付けてるけど。

『解体！　ゲストはこんな人！』

このラジオに参加して下さるゲストの方への質問コーナーだけど。

『告白！　私の実体験！』

リスナーの皆さんが最近感じた事を発表して、それについて司会進行とゲストの皆さんで話すコーナーだけど。基本的な常識に沿っていれば、どんな内容でも良いけど。

これ以外にも普通のお便りとかコーナー募集も受け付けてるから、応募して欲しいけど……ネタが無ければ放送出来ないから」

ゼリガン「因みに次回だが、『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～氷翼の天使～』より『リオス＝コーネルド』と『エミリア』。そして『レーネ』の３人がゲスト出演するぞ！　３人とはこちらも漲って来たアアアアアアッ！！！」

エルンスト「司会は……は？　何で『ルナマリア＝ホーク』と『メイリン＝ホーク』！？　アイツら『禁断の刃』と何の関係も無いだろう！？」

ヴィント「ルナが、『アレなら、私でも、出来る』って、言ったら、こうなった、らしいわ。まあ、物は、試し、だから」

エルンスト「あの馬鹿作者……ドコぞのヤドカリ怪人の如くトラックでバックしながら轢き殺してやるけど……。今日の司会は私『刃鞭のエルンスト』と」

ゼリガン「『ゼリガン＝ヒューイット』！」

ヴィント「そして、『双棍のヴィント』と、

（鈍）織斑建設

（刀）篠ノ之道場

（毒）オルコットクッキング

（空）鳳中華

（強）シャルロッ党

（変）黒兎部隊

の、提供で、放送したわ。

……もう、アニメ、終わってるのに」

第3回「馬鹿と空気とドS女王」（後書き）

禁刃のラジオ　～大戦の舞台裏～の募集要項

ゲスト出演条件

1．『最低１０話以上』進んでいる作品で、作品での立ち位置が明確なキャラ。

2．リリカルなのはの二次創作。但し、そうでなくても作者が知っていれば出せます。

3．最低2ヶ月以内に更新している作品

4．上記の条件を満たした上で、メッセージで出して欲しいキャラクターについて送って下さい！

お便りコーナー

1．送るのはメッセージ、若しくは感想でお願いします。

2．住所（勿論架空の物でお願いします）・ペンネーム・送るコーナーのタイトルとその内容を書いてムーギネーターのメッセージボックスへ。

3．荒らしや中傷など、非常識な物以外なら下記のコーナーのお題とは関係の無い普通のお便りでも受け付けます。

コーナーのタイトル

『質問！禁断の刃！』

本編『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～禁断の刃～』についての質問コーナーです。本編の内容や登場キャラクターへの質問について司会進行が答えます。

『解体！ゲストはこんな人！』

このラジオに参加して下さるゲストの方への質問コーナーです。

『告白！私の実体験！』

リスナーの皆さんが最近感じた事を発表して、それについて司会進行とゲストの皆さんで話すコーナーです。

この他に、コーナーについても募集しています！どしどし御応募下さい。

『お便りが現在０なので、暇な時にでもお願いします』

第４回「異端ＭＣのクロワーゼ」（前書き）

３ヶ月も放置して済みません！

酷い出来ですが、宜しければどうぞ！

第４回「異端ＭＣのクロワーゼ」

ルナマリア「あづい……」

メイリン「今日も３０度超えって〇ＨＫの〇ちゃんが言ってたからね……。と言うかお姉ちゃん、水飲み過ぎじゃない？　それで小さなペットボトル３本目だよ？」

ルナマリア「そんな事言ったって飲んだ傍から喉が渇くんだもん……」

メイリン「それってどっかのダメ二次作家と同じ台詞だよ。そうやってあの作家はペットボトルの烏龍茶を飲み過ぎて食欲不振になってバテたんだから」

ルナマリア「１日１本飲み干してたんだっけ？　……って作者の失敗談の暴露は止めようか」

メイリン「そうだね、何か馬鹿らしくなって来たし。そう言えばさ、お姉ちゃん〇ンメモとスパロ〇に出てたよね？　“私を置いて”」

ルナマリア「ちょっ、メイリン？　何か黒いオーラが出てるんだけど……（汗）」

メイリン「気のせいだよ、気・の・せ・い。それより“私を置いて”“自分だけ”出演したのはどう言う事なのかちょっと教えて欲しいんだけど」

ルナマリア「そ、そんなの私じゃなくてバン〇イとバン〇レストに

言ってよ！　出そうと思えばエターナルのサブで出せたのに、出さないバンダ〇と〇ンプレストが悪いんじゃない！　て言うか私に出演をどうこう言える訳無いじゃない！」

メイリン「それもそうか……じゃあこの間呼んだバ〇ダイとバンプレス〇のアプリリウス支部のトップの人の謝罪で我慢するね」

ルナマリア「〇ンダイとバンプ〇ストのアプリリウス支部！？　この間ウチに来た人達がそうだったの！？」

メイリン「そうだよ。私が出演枠の不自然さについて淡々と述べたら菓子折りを持って謝罪してくれたよ」

ルナマリア「そ、それは……そうだろうね……。ん、何……あ〝（汗）」

メイリン「どうしたの？」

ルナマリア「マイクのスイッチ……切るの忘れてた……」

メイリン「え……？」

～暫くお待ち下さい～

禁刃のラジオ　～大戦の舞台裏～　第４回「異端ＭＣのクロワーゼ」

メイリン「どうもこんにちは！　今回のＭＣは『赤き鷹の名ストッパー、出番の為なら手段は選ばず』メイリン＝ホークと」

ルナマリア「私、参上！　『全世界モノアイ愛好会1番隊隊長』&『ザフトの誇る不屈のエース・オブ・エース』&『通りすがりのモノアイライダー』&『ザフトの赤き鷹』&『モノアイ女王（クイーン）』あーんど……」

メイリン「ストップストップストーーップ！！！　最早自己紹介じゃなくて“事故（アクシデント）”紹介だから！　あまりに痛過ぎて聴くに耐えないから！」

ルナマリア「えー」

メイリン「えーじゃなくて！　頼むから1個に絞って！　お願いだから！」

ルナマリア「昨日から徹夜して考えたのに……。レッド党の会長や幹部やってる友達にも相談して決めたのに……」

メイリン「レッド党って何いいいいッ！？　そんなの『逆襲の赤き鷹』にも出てないでしょ！　何処の誰なのそんな組織作ったのは！！！」

ルナマリア「それは……ゴニョゴニョ」

（スタッフとメイリンに耳打ち）

メイリン「ちょっ、何やってるんですかエリア〇〇の〇〇〇さん！　て言うか最早ガンダム世界の人ですら無いし！」

（スタッフもざわざわ）

ルナマリア「スタッフの皆さん、この話はオフレコですからね。喋ったらその人はお終いですよ」

メイリン「何処の９日大臣！？　危ないネタはしないでって言ったでしょうがあああああッ！！！！」

（１０ｔと書かれたハンマーでルナマリアの後頭部を殴打）

ルナマリア「ヒデブッ！！！」

メイリン「全く……。あ、もう時間ですか！？　そ、それでは今日のゲストはこの方々！　『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～氷翼の天使～』の主人公、リオス＝コーネルドさんと！」

ルナマリア（巨大なたんこぶが頭に出来て机に減り込んだまま）「エミリアにレーネ……です……」

（そのまま気絶・口から魂らしき物が出ている）

リオス「だ、大丈夫なのアレ……？」

メイリン「大丈夫ですよ。“フリーダムを墜とすまでは死んでも死にきれない”って常々言ってますから」

レーネ「２人共、テレビで観てたのと随分イメージ違うわね……」

メイリン「そうですかね？　だとしたらアレです、映像デビューで緊張してたんですよきっと」

レーネ「いや、変わり過ぎでしょ！　某矢車さんがやさぐるま化し

てた位別人に見えるんだけど！」

メイリン「問題無いですよ。矢車さんだってアレで人気出たんですから」

レーネ「そう言う問題じゃないっつーの！！！」

エミリア「……（ルナマリアをつんつん）」

リオス「あの、エミリア？」

ルナマリア（魂）「あ、お花畑とシンが見える……。ココがあの世か、それも良い……」

エミリア「……誤射繋がり？」

リオス「いやシン生きてるし！　ルナマリア死なないで！　まだフリーダムはいるから！」

ルナマリア「フリーダム……？　フリーダムゥゥゥゥゥッ！！！！！」

（魂が口の中に戻る）

リオス「良かった……無事蘇った……」

レーネ「もう良い……必死になって突っ込んでた私が馬鹿だった……」

エミリア「……レーネ、超疲労」

メイリン「ゲストの皆さんが落ち着いたので、そろそろ最初のコーナーに行きますね」

レーネ「誰のせいよ誰のおおおおおッ！！！！！」

～解体！　ゲストはこんな人！～

ルナマリア「このコーナーは、このラジオに参加してくれてるゲストへの質問コーナーね」

メイリン「じゃあ読みますね。え～と……ムーギネーター先生の家の隣にお住まいの、ＲＮ：フラグ堕天使さん。……フラグ堕天使さん、“アレ”に“先生”を付けるだけの価値は無いですよ」

リオス「いや、仮にも書いてる人にそれは……」

エミリア「人扱い、ですらない……」

レーネ「何か哀れになって来るわね……」

メイリン「いえいえ、アレはアレでしかないですから。それで内容はですね、リオスさんへのピンポイント質問ですね。

『なのはとの間に子供が出来たとしたら、
男の子と女の子、どっちがいいですか？
それと、名前はなんと名付けますか？』
だそうです」

リオス「こ、こここここここ子供！？　え、えっと……そ、そそそそう言うのはまだ考えてないと言うか、何と言うか……あ、あぅ／／／／／／／／」

レーネ「て言うか、名前とか言っちゃったら、登場させる時のネタバレになるって口止めされてんでしょーが」

エミリア「……レーネ、メタ」

リオス「うう……ヴィレイサー……／／／／／／」

メイリン「ありゃー、残念ですねぇ」

ルナマリア「まぁ、出て来て暫くしてから『実は2人の子供でしたー』って方がビックリ感があって良いだろうしね」

レーネ「そう言うルナとメイリンは、何か考えてんの？　特にメイリンにはあ・の・人がいるでしょ？　（ニヤニヤ）」

メイリン「えっ！？　い……いやその……わ、私はまだそう言うのは……。と言うかそのデートとかもしてないですし……／／／／／／／／／／」

レーネ「へぇ～……“まだ”って事はこれから予定があるって判断して良いのかしら？」

メイリン「え、ええっと……。しょ、しょの……／／／／／／／／／／」

エミリア「メイリン、赤面」

ルナマリア（持てる限りの大量のフリップを用意しながら）「おぉ〜、私のザクより真っ赤」

リオス「いや何故ザク基準！？　て言うかその大量のフリップは何！？」

ルナマリア「へ？　私に子供が出来た場合の名前候補だけど？」

レーネ「どれどれ……（フリップを覗き込んで）……いや見せなくて良いから。見た人が漏れ無く残念な気分にしかならないから」

ルナマリア「ええっ、賛同を頂けないの！？」

レーネ「いや、それで頂ける人がいたら見てみたいわよ……」

ルナマリア「レッド党の会長やってる友達は『ルナ、センス良いわね』って言ってたのになぁ……」

リオス「誰なのさそれ……。いや誰か何となく分かるけど正解を知ったらあの子のイメージが激しく崩壊する気しかしないよ……」

エミリア「日本、将来不安」

メイリン「だ、脱線しそうだから結論に行きますね！／／／／／／／／／　ええと……質問の答えですが、

『まだ決まっていない。と言うか口止めされてる』

です！／／／／／」

レーネ「もうちょっと弄ろうと思ったのに、ＭＣ権限を使ってかわすとはね……」

メイリン「も、もう良いじゃないですか！／／／／／

レーネ「エミリアも見てないで手伝いなさいよ！」

エミリア「……どうどう」

ルナマリア「私は馬かあああああッ！！！！！」

レーネ「火にガソリン注いでどうすんのよおおおおッ！！！」

（番組の途中ですが、スタジオで赤服（笑）が暴れだした為に一時放送を中断してＣＭをお送り致します）

～～～

シュヴァルツ「聖王正教から」

〜〜〜

リオス「さすが……えげつないね（汗）」

エミリア「鋏でじわじわ痛めつけるんですね、解ります（棒読み）」

レーネ「そこ！　うっさいっ！！」

メイリン「まあまあ、カッコイイから良いじゃないですか。でもアレ、１度記録映像で観たんですけど結構怖いですよねぇ……」

エミリア「ドアップは、ド迫力」

リオス「ふふ。エミリアは……何だろうね？」

レーネ「紅蓮聖天八極式、とかどう？」

リオス「そうなると、僕はランスロットアルビオンの方が良かったのかな」

エミリア「……はじけろぶりたにあー」

レーネ「……何だか、凄く締まらないわね」

リオス「あ、あはは（汗）」

メイリン「た、確かに……」

レーネ「そう言えば、メイリンは何か乗りたい物ってあるの？」

メイリン「私ですか？　ザフト製のＭＳも良いですけど、１番はゼク・ツヴァイですね。あのデザインが大好きなんです」

レーネ「それってガンダムセンチネルのＭＳでしょ？　またゴツイのを選んだわね……」

メイリン「良く言われます、“イメージと違う”って。ツイッターで呟いたら凄い反応が返って来て炎上しましたし」

リオス「ツイッター、やってたんだ……（汗）」

メイリン「やってますよ。他にもお姉ちゃんと一緒にブログも。……って言ってもブログは殆んどお姉ちゃんの物になってますけど。私に仕事を押し付けてブログでグフと戯れるなんて……」

レーネ「“グフと戯れる”って猫じゃあるまいし……（汗）」

リオス「ルナらしい、のかな……」

エミリア「ＭＳ、萌え」

メイリン「いや、正にその通りなんですよ……。名前付けて大事に清掃してるし、暇があれば乗って散歩してるし……」

レーネ「どんだけ自由なのよ……」

ルナマリア「別に良いじゃない。格納庫に眠らせておくのは可哀想なんだもの」

リオス「まあ、大事にするのは良いこ……ってルナ！？」

ルナマリア「ん？　どうしたのリオス？」

リオス「いや、どうしたのって……何重にも重ね掛けしたバインドをどうやって解いたのさ！？」

ルナマリア「アレなら縄抜けの術で」

レーネ「忍者かアンタは！」

エミリア「ルナ、アレは？」

（バインドで雁字搦めになっているスタッフが横たわっている）

ルナマリア「偶々近くにいたから、ちょっと身代わりになって貰ったのよ」

レーネ「何をどうやったらこんな事になるのよ！」

リオス「スタッフさんゴメンなさい！　今すぐ解除しますから！」

エミリア「スタッフ、災難」

（3人が慌ててバインドを解く）

メイリン「ええとそう言う訳で質問の答えは

『リオスさんがダブルオーライザー、レーネさんがアリオスガンダム。そしてエミリアさんが紅蓮聖天八極式』

です！」

ルナマリア「それじゃあ次のお便りを。森羅万象にお住まいのＲＮ：既に2回程死んだ、死亡フラグの生産者さん」

リオス「ま、またあの人からなの……（汗）」

ルナマリア「『リオスくんは、コスプレが趣味……ゲフンゲフン。……はやて達にコスプレを強要されている様ですが、もしも『好きな衣装を着てコスプレしろ』と命令されたら、どんなコスプレをしたいですか？』

だって。どうなの、リオス？」

リオス「言いかけた！　今、趣味って言いかけたっ！／／／／／／／／／／」

レーネ「いや、て言うかもう全部口に出てたよね？」

エミリア「ダダ、漏れ」

リオス「好きな衣装、ですか……そうですね、では教師なんてどうです？　あれなら、男女差殆どありませんから♪」

レーネ「……何だかつまんない解答」

リオス「うっさい！　じゃあどうしろってのさ！？」

レーネ「そりゃ……フリフリのメイド服とか、チアガールとか……（ニヤ）」

リオス「僕は、お・と・こ・の・こ！　なのっ！／／／／／／／／」

レーネ「それ位解ってるわよ。？男の娘？と書いて、？おとこのこ？。そうでしょ？　（ニヤニヤ）」

ルナマリア「ああ、成程ォ♪　（ニヤニヤ）」

リオス「ちっがあああああぁぁぁぁぁぁぁうっ！／／／／／／／／／／／／／／」

レーネ「ふふふふふふふふふふふ……♪　（ほくほく）」

エミリア「レーネ……輝いてる……」

リオス「うう……（泣）」

～～～

ファンド！

夏にピッタリ！　ファンド、ブート・ジョロキア！

～～～

『取り敢えず、マイクを壊す位の勢いで『ヴォルテッカァァァ』と叫んで下さいw』

テッカマン……だっけ？」

メイリン「うん、声優の森川さんの伝説の１つ。スタッフさん、お願いします」

（スタッフが漫才などで使う形のマイクを隣の部屋に設置する）

メイリン「ええと、今から事前に引いたクジの順番に隣の部屋に行って、叫んで下さいね」

リオス「うん」

レーネ「ええ」

エミリア（コクッ）

ルナマリア「じゃあ、１番手で私が」

（ルナマリア、マイクの部屋に移動）

ルナマリア「……コホン……

ヴォルテッカアアアアアアアアアッ！！！！！！！！」

リオス「結構声出るんだね、ルナ」

メイリン「声と歌には自信持ってますからね、お姉ちゃん」

エミリア「中の人的な、意味で？」

レーネ「メタな台詞は止めなさいよ……。っと、次は私か」

（レーネ、移動）

レーネ「せぇのぉ……

ヴゥォルテッカアアアアアアアアッ！！！！！！！！」

メイリン「叫んでるのに何か様になりますね」

ルナマリア「流石は○宮さん的声。アレ？　でもこの声、この間戦ったGのパイロットに似てる気が……」

エミリア「トリ○ティ？」

リオス「メタは止めてね、２人共。絶対多方面から苦情が来るから」

（突っ込みつつリオス、移動）

リオス「すぅ……

ヴォールテッカアアアアアアアッ！！！！！」

ルナマリア「叫んでも何か可愛い気がするんだけど」

レーネ「まあ、リオスらしいったらしいわね」

エミリア「愛玩、系？」

メイリン「ドコでその言葉を覚えたんですか……（汗）」

エミリア「はやて」

メイリン「即答したんですけどこの人……」

（メイリン、移動）

メイリン「せぇのぉ……」

ヴォルテッカーーーーッ！！！！！」

リオス「な、何か溜まった物を吐き出してるみたいなんだけど……（汗）」

レーネ「た、確かに……。苦労してんのね、あの子」

ルナマリア「？？？」

エミリア「まだ、苦労は溜まるかも」

（エミリア、別室に移動）

レーネ「最後はエミリアね」

メイリン「ちょっと叫ぶのは無理っぽいですよね」

リオス「そうだね。想像がつかないし」

ルナマリア「あ、準備出来たみたいよ」

エミリア「すぅ……」

……

……

……

……

ヴォルテッカアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！」

（マイクと音響機器が全て壊れる。更に部屋のガラスが割れ、時計が落ちる）

ルナマリア「な、何て声……（目を回しながら）」

メイリン「しゅ、しゅごしゅぎでしゅ……（目を回しながら）」

リオス「まさか、エミリアがココまでやるなんて……（気絶）」

レーネ「甘く、見過ぎてたみたい……（気絶）」

エミリア「……ブイ（Vサインをしながら）」

～暫くお待ち下さい～

～～～

ルナマリア「メ、メイリン大丈夫……？」

リオス「あうう……頭が……」

レーネ「エミリア、アンタは今後大声出すの禁止……」

エミリア「展開、次第」

レーネ「そんな展開があるなら、私はそのふざけた幻想をブチ殺す……」

メイリン「と、取り敢えず……次のコーナーに……」

～センチメンタリズムな運命（デスティニー）～

メイリン「このコーナーは、リスナーの皆様が感動したり衝撃を受けたりした出来事を元にＭＣとゲストが話すコーナーです」

ルナマリア「お便りは……次元の狭間にお住まいのＲＮ：第６６６６回『次元の狭間から』さん。２回目ありがとうございます。

『ゲームで滅多にとれなかったアイテムをゲット！　しかし喜びに浸ってセーブするの忘れそのアイテムがパーに……ｏｒｚ
これも、運命（さだめ）ですかね？ｗ』

コレはキツイわね……。特にアイテムコンプとかを狙ってたら」

メイリン「上げて落とされた感じだもんね……」

リオス「だ、大丈夫！　作者さんも何度もあるって言ってたからっ

！（汗）」

レーネ「その時の喪失感、計り知れない物があるわね……」

エミリア「ぜんぶ、ぱー」

リオス「でも、もう1回手に入れた時にはそのアイテムが必要ない程強くなってる事もしばしば……w」

レーネ「あー……確かにw」

メイリン「ありますよねぇ、そう言うの。ウチの作者（笑）もゲームやっててしょっちゅうそう言う経験してますし」

ルナマリア「作者（笑）がそれやる場合、寝落ちしてセーブした事を忘れてだけどね」

エミリア「不注意、作者？」

メイリン「まあそんな感じです。うっかり操作間違ってカメ諸共マ○オを谷底に転落させたりとか、ク○パの当たり判定を間違って死んだり。酷いのは物理攻撃をするとパーティーを全滅させて来るモンスターに寝惚けて物理攻撃したり……本当に酷いんですよね」

リオス「それは……中々だね……（汗）」

レーネ「って言うか、眠い時にゲームしなくても……」

ルナマリア「その線引きが出来ないのよ、アレは」

～告白！　私の実体験！～

ルナマリア「このコーナーはリスナーの皆さんが最近体験した悩み事を発表し、それについて司会進行とゲストの皆で話すコーナーね。何かさっきのコーナーと被って気がするけど気にしない気にしない！」

レーネ「いや、気にしなさいよ！　気がするどころか被りまくりじゃない！」

メイリン「レーネさん、ウチの作者のクオリティ上仕方無い事なんです。後でウチの作者（笑）をミンチにして良いですから勘弁して下さい」

レーネ「なら仕方無いわね、それで勘弁してあげるわ」

リオス「ダメえええええッ！！！」

エミリア「なむなむ」

リオス「エミリア、それ縁起でも無いからね！　て言うか死ぬの前提！？」

ルナマリア「それじゃあまずは、次元の狭間にお住まいのＲＮ：第６６６６回『次元の狭間から』さん。……今日３回目ね。

『最近ジメジメ＆猛暑で辛い日々が続いてます。自分溶けてしまいそうですｗ
皆さんは暑い時、どの様にして過ごしますか？　自分は取り敢えずゲームして気分を紛らわせますｗ』

本当に参るわよね……」

リオス「そうですねぇ……ジメジメしてると食材も悪くなりやすいですし、僕は機械でも弄って過ごしますね♪」

レーネ「私は……読書かなぁ？　最近はまってるラノベがあるの」

エミリア「……お昼寝」

ルナマリア「皆、らしいわね。私はグーンで海に潜ったりしてるかな。爽快なのよね、アレ」

レーネ「良いわねそれ。綺麗な海って見てるだけで涼しくなるし」

メイリン「それやってこの間凶暴な鮫の群れに襲われたんですけどね」

エミリア「ふかひれ、どっさり」

ルナマリア「し、仕方無いじゃない！　まさかあんな太平洋のド真ん中で出くわすと思わなかったんだもの！（汗）」

メイリン「だからって武装をフルに使って迎撃しなくても逃げれば良いじゃない」

ルナマリア「いきなり襲って来たら誰でもああなるわよ！」

リオス「まあまあ、ルナ落ち着いて。でもそれって災難だよね」

メイリン「まあ、そうそうある事じゃないですしね。じゃあ次のお便りを。『不定、元は人だった気がする』にお住まいのＲＮ：じげ…じげ…ゲジゲジ虫さん。……今日２度目ですね。

『新春……はもうとっくに過ぎて夏に入ろうとしていますが、新入生や新社会人はもう新しい生活に慣れたり部活動に励んでいる時期ですよね。
かく言う私も部活に入って色々と慣れて来た頃だったりします。
だけど、未だに慣れないと言うか分からない事が一つ……
なんで“部室のロッカーをゴスロリ服やウェディングドレスやメイド服がナチュラルに占領しているのだろう……”
いや、文化系ではありますが別にコスプレ研究会でも手芸部でも無いんですよ？
学校開放日に部活動見学に来た中学生３年生達がドン引きしておりました。
誰か……解決法をご教授下さい』

……凄い光景ですね（汗）」

リオス「そ、それは深刻な悩みですね……。お気持ち、痛い程良く解ります！　（泣）」

レーネ「アンタもあったの、そう言う事？」

リオス「そりゃもう……毎日の様に」

レーネ「……犯人は……まあ、大体検討はつくけど」

エミリア「ちび、たぬき」

メイリン「またはやてさんですか……（汗）」

リオス「解決方法、ねぇ……取り敢えず僕は、そう言う服を入れられない様に他の荷物でぎゅぅぎゅぅ詰めにしましたね。……そしたら、代わりに部屋のベッドの上に標的が移ったけど（泣）」

レーネ「それ……」

エミリア「解決、してない……」

ルナマリア「なら部屋を荷物で一杯にしたら？」

メイリン「お姉ちゃん、それじゃその部屋使えないから」

ルナマリア「あ゛」

リオス「うう……（泣）」

ルナマリア「と、戸を切り直してメイリン！　今日最後のお便りを！」

メイリン「“気を取り直して”だよ。ええと……埼玉県の水槽にお住まいのＲＮ：混血の烙印さん……今日３回目ですね。

『最近と言う訳ではないのですが、数年に１回大けがをしている気がします。

幼少期の頃は、3階から2階へ降りる際に梯子から転落。

小学生の頃か中学生の時、剪定ばさみが膝に刺さる。

高校生の時、柔道の授業中に相手に足を踏まれて親指の爪が割れる。

同じく高校生の頃に、美術の選択授業の時に彫刻刀で左手人差し指をザックリしました。

今は大学生になっているのですが、この時はどんな大怪我をするのか今からドキド……ゲフンゲフン。　ゾクゾクしています『

……最後のは盛り上げる為、だよね……？」

ルナマリア「多分……」

リオス「僕なんて、氷翼の天使時代は一回の任務につき一回、大怪我してましたよ？　何度シャマル先生のお世話になった事か……（遠い目）」

レーネ「確かに、あの頃は生傷絶えなかったわよね、アンタ……（汗）」

エミリア「かわい、そう……（ホロリ）」

ルナマリア「何て言うか、その……ご愁傷様。今度何か送るわね」

メイリン「そう言えば、『禁断の刃』の機動6課も生傷が絶えないらしいですね……そう考えたらシャマルさんってかなり重要ですね」

レーネ「確かにいないと困るわね、普段の存在感がアレだけど」

エミリア「空気は、大事」

リオス「エミリア、それフォローなのか何なのか分からないから……（汗）」

メイリン「エミリアさんの台詞は兎も角、戦闘するタイプの人じゃないとどうしても出番が減りますよね……。何で私、オペレーターを選んだんだろ……（溜息）」

ルナマリア「だ、大丈夫よ！　作者（笑）を脅せば出番なんてすぐ増えるから！」

リオス「何か物騒な話してる！　そっちの作者さんの命が本当に心配なんだけど！」

メイリン「大丈夫ですよ、“命までは取りませんから”。え……そろそろ時間ですか？　じゃあリオスさん、宣伝宜しくお願いします」

リオス「あ、うん。

『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～氷翼の天使～』

闇の書事件から１０年。管理局のエースであるなのは、フェイト、はやての３人は、部隊？機動六課？を創設する。一方、六課への入隊を前に研修として任務に訪れていたスバル＝ナカジマとティアナ＝ランスターの二人は、記憶喪失の青年を保護するが……。

今は『氷翼の天使』の続編、『新魔法戦記リリカルＡｎｇｅｌｓ

～Ｔｈｅ　Ｒｕｌｅ　ｏｆ　Ｇｏｄｓ～』が絶賛連載中です。僕達と新たな機動６課のメンバー達の活躍に是非ご注目下さい！」

エミリア「レーネの、ツンデ……」

レーネ「だ、誰がツンデレよ誰が！／／／／／」

ルナマリア「え？　神崎さんから『レーネはツンデレ化する』って聞いたんだけど？」

レーネ「アイツ……！」

メイリン「ま、まあまあ……落ち着いて下さい。ええと、今日はありがとうございました。暇があったらまた来て下さいね」

リオス「うん！　じゃあまた」

レーネ「ひ、暇があったらね！／／／」

エミリア「……バイバイ」

ルナマリア「バイバ～イ♪」

（３人が退室）

ルナマリア「疲れたー。けど、楽しかったわね」

メイリン「うん。最初は不安だったけど、やってるうちに楽しくなって来たね。……って忘れてた、この番組の説明をしないと。

この番組『禁刃のラジオ　～大戦の舞台裏～』ではリスナーの皆さんからのお便りを絶賛大募集しています。

コーナーは、

『質問！　禁断の刃！』

『王佐の刃』が総出演しているドラマ『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～禁断の刃～』についての質問コーナーです。勿論個人的な質問も受け付けていますよ。

『解体！　ゲストはこんな人！』

このラジオに参加して下さるゲストの方への質問コーナーです。

『告白！　私の実体験！』

リスナーの皆さんが最近感じた事を発表して、それについて司会進行とゲストの皆さんで話すコーナーです。基本的な常識に沿っていれば、どんな内容でも良い大丈夫ですよ！

『不可能を可能にする〇〇』

ゲストの皆さんやＭＣがリクエストされたネタをやる、と言うコーナーですね。中の人ネタとか有名なシーンのネタを出来るだけ再現します。

『センチメンタリズムな運命（デスティニー）』

リスナーの皆さんが感動したり衝撃を受けたりした出来事を元にＭ

Cとゲストが話すコーナーです。

これ以外にも普通のお便りとかコーナー募集も受け付けてますので、応募して下さいね！」

ルナマリア「因みに次回は、『弟は真田幸村』から『真田雪』と『猿飛千歳』の2人がゲスト出演するわね。初のリリなの以外のゲストだけど、大丈夫なのかな……」

メイリン「次回は『刀のフラメ』さんと『アデル＝クリーシア』さんの主従コンビだから大丈夫だと思うけど……」

エルンスト「まああの2人なら何とかなるわね。それでは今日の司会は私『ルナマリア＝ホーク』と」

ヴィント「『メイリン＝ホーク』。そして

（愛）全世界モノアイ愛好会

（忠）メイリン親衛隊

（馬）文月学園

（癒）アンセーニュ・ド・ロア

（歌）765プロ

（幼）慧心学園

（武）東京武偵高校

の、提供で放送しました！

今回は提供が多い様な……」

第４回「異端ＭＣのクロワーゼ」（後書き）

禁刃のラジオ　～大戦の舞台裏～の募集要項

ゲスト出演条件

1．『最低１０話以上』進んでいる作品で、作品での立ち位置が明確なキャラ。

2．リリカルなのはの二次創作。但し、そうでなくても作者が知っていれば出せます。

3．最低2ヶ月以内に更新している作品

4．上記の条件を満たした上で、メッセージで出して欲しいキャラクターについて送って下さい！

お便りコーナー

1．送るのはメッセージ、若しくは感想でお願いします。

2．住所（勿論架空の物でお願いします）・ペンネーム・送るコーナーのタイトルとその内容を書いてムーギネーターのメッセージボックスへ。

3．荒らしや中傷など、非常識な物以外なら下記のコーナーのお題とは関係の無い普通のお便りでも受け付けます。

コーナーのタイトル

『質問！禁断の刃！』

本編『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～禁断の刃～』についての質問コーナーです。本編の内容や登場キャラクターへの質問について司会進行が答えます。

『解体！ゲストはこんな人！』

このラジオに参加して下さるゲストの方への質問コーナーです。

『告白！私の実体験！』

リスナーの皆さんが最近感じた事を発表して、それについて司会進行とゲストの皆さんで話すコーナーです。

『不可能を可能にする〇〇』

ゲストの皆さんやＭＣがリクエストされたネタをやる、と言うコーナーです。中の人ネタとか有名なシーンのネタを出来るだけ再現します。

『センチメンタリズムな運命（デスティニー）』

リスナーの皆さんが感動したり衝撃を受けたりした出来事を元にＭＣとゲストが話すコーナーです。

この他に、コーナーについても募集しています！どしどし御応募下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3046q/

【習作】禁刃のラジオ　～大戦の舞台裏～

2011年11月16日16時49分発行